
二人の英雄と七人の道化師と

空条嬢一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の英雄と七人の道化師と

【Nコード】

N6300H

【作者名】

空条嬢一

【あらすじ】

対立する二つの種族の英雄の話。自由と幸せを願い世界を旅する物語。

この世界の始まりとそれを謳う道化師と

暗闇に立つ一人の道化師。その手にある数奇なる玉。それを軽快に上にあげながら、一人、道化師は踊りだした。

楽しそうに、陽気に、何に笑っているのか分からない。しかし、道化師は笑う。

そして、唐突にも、その道化師は喋り出したのだ。

ある歴史の話をしよう。果てを誰も見たことのない世界、アース。その世界には四人の神が創り出した一つの種族が存在した。ヴァン神族と呼ばれる種族であった。

四人の神は、そのヴァン神族を神と崇めるため、さらに種族を創り出した。

ファンタジア・アルアカディア・ハビリスである。

ヴァンは天を、ファンタジアは海、アルアカディアは大地、ハビリスは森をそれぞれ支配することを決めた。

神はこの三つの種族にあるモノを授けた。ファンタジアには神秘的な力の源の「ウォルナ」を与え、独自の研究により、魔法を生み出した。アルカディアには神の持つ技術「アーティファクト」で今日までの機械文明の礎を創り出した。そしてハビリスには自由の「ガデス」によりアースの発展と繁栄を導いた。彼らは共にアースのため、共存の道を歩んでいた。

ヴァン神族は他の種族を嫌った。全種族平等ではなく、自分たちこそが最高の種族である。その思いを実現させるために他の種族へとある戦争を持ち掛けた。全種族が自分たちの力で創り上げてきた

象徴とも呼べるモノの覇権を争うというものだった。ヴァン神族には「フレア」と呼ばれる太陽。ファンタジアには知識の源の「ミール」の泉、アルカディアの大地豊穡の「ガイア」、ハビリスにおける世界樹と言われる「ユグドラシル」がある。これを賭けた戦いであつた。

それが「第一次ジェノサイド」である。それはヴァン神族以外の全ての種族が協力し戦つたため、ヴァン神族は滅亡し、終止符を打たれた。

しかし、ある問題が起こつた。ヴァン神族の象徴である「フレア」を支配するものが無くなつてしまったため、「フレア」が暴走を始めたのだ。その「フレア」をファンタジアのある英雄の命と引き換えにしてファンタジアの支配下に置くことに成功した。しかし、「フレア」と「ミール」の泉を支配下に置いたファンタジアは残りの二つまでも支配下に置こうとアルカディア・ハビリス両種族にも戦争を仕掛けた。これが「第二次ジェノサイド」である。その戦争でもアルカディアとハビリスの同盟軍は「フレア」を再び、ファンタジアの支配下から解放することにも成功した。しかし、いつ「フレア」が暴走するとも解らない。そのためにもファンタジアとアルカディアは戦争を繰り返すようになった。ハビリスは戦争に参加の意向を示さなかつた。

これは、ある二人の物語。
世界の果てを見届ける物語。

ゼロとイヴと

ファンタジアの治める領地の中枢となる都市バーデイミアン。君主であるエリオット十二世の居城を中心に、歴史的な建造物が数多く、周りを囲む城壁は高く、虫一匹入る隙間もない。都市にいる人々の顔にはいつも笑いが絶えない。今日は一ヶ月に一度の祭り、感謝祭の日。その賑やかな町中を何の目的もなくフラフラと歩いている男が一人。

男の名はゼロ。腰まで伸びた黒の髪。体を全て覆い尽くすようなマントを纏っている。マントのフード部分にはネコのぬいぐるみが入っている。

「せっかくのお祭りだろ？楽しもうぜ」

ぬいぐるみのネコは喋り出した。しかし、ゼロは何の驚きも見せない。それがゼロにとっては当然のことだから。ぬいぐるみのネコは祭りだ、楽しもう、と言い続けている。ゼロが話を無視しているとポケットから陽気な音楽が鳴り出す。取り出したものは「フォトン」と呼ばれている球体であった。

フォトンとは通信手段として発達した機械であり、特定の人物へメッセージを送ることができる。発信者の名前を見るなりゼロは露骨に嫌な顔を示した。フォトンからメッセージが浮かびだす。それはいつも見慣れた文だった。ゼロはメッセージを読み終えると、ある場所へと向かった。

居城・ヴァルハラ。ファンタジアの最重要拠点である巨大な城。

その城の王座の間にゼロはいた。マントは外さないし、頭も下げていない。普通の人間と接するように自国の君主と対面している。王座の間にはエリオット十二世とその側近、カルヴァンが立っている。周りには親衛隊も数人。エリオット十二世は王座に座りながらゼロを見下ろしている。先に口を開いたのはエリオット十二世だった。

「ゼロ。貴公にウォーランド高地にて進軍中のアルカディア兵の討

伐を命ずる」

「また討伐か、ちゃんと報酬は払えよ」

その言葉の後、ゼロの首筋に剣の切っ先が向けられていた。カルヴァンが王座の横からここまで一瞬で近づいていた。鋭い眼光でゼロを睨みつける。ゼロは取り乱すこともなく、切っ先を見つめていた。「貴様、毎度のことながら言葉を弁えろ。なぜ跪かない。愚弄しているのか？」

切っ先は依然として、首に突き付けられたままだった

「カルヴァンよ、別に良い。ゼロは特別だ」

「しかし、国王」

「彼に強要してはいけないよ。彼の前で地位など関係ない」

その言葉で剣を鞘にしまい、不服そうに下がっていく。

「頼んだぞ。ゼロ」

「わかっている」

ゼロは一礼もせず、帰って行った。

ゼロはバーディミアンから目的地のウオーランド高地を目指す。ぬいぐるみはゼロにある提案を申し込んだ。

「別に急がなくてもいいだろ？ あそこに行こうぜ、ベルニカ。なあ、行こうぜ」

ベルニカ。バーディミアンとウオーランド高地の真ん中に位置する工業都市。ファンタジアでもなくアルカディアでもない、ハビリスの領地。このベルニカはアース三大娯楽都市と呼ばれるほどで、種族に関係なくこの都市で有意義な時間を過ごしている者は多い。確かに、今回の任務開始時間までは余裕がある。たまの息抜きと思えばゼロは行くことを了承した。

三大娯楽都市だけあってか、日付が変わろうとも全く輝きを失っていないなかった。カジノやバー。そびえ立つホテル。通称「眠らない

街ベルニカ」の入り口である大橋でゼロはぬいぐるみに話をしていた。

「いいか、今夜泊まるホテルの名前とお小遣いだ。あんまり使うなよ。ちゃんと時間には帰って来い」

「わかってるって、安心しろ。倍にして返してやる」

信じる理由のない言葉を吐きながらぬいぐるみは夜の街に溶け込んでいった。ゼロは当てもなく歩き始めた。

集合時間になってもぬいぐるみは現れなかった。どこかの路地裏で野良犬やらに噛まれているのではないかと思い探し回ったが結局見つかることはなかった。ぬいぐるみの行きそうな場所も探したがいなかった。あるカジノでは大勝した後に何処かへと消えていったぬいぐるみを見たという情報もあった。ダメもとではあったが大橋のほうまで足を運ぶことにした。ぬいぐるみの性質上、決していなと思った。

しかし、ぬいぐるみはゼロの予想を簡単に裏切った。大橋にいたのだ。それも様子がおかしかった。小さな女の子に抱きかかえられている。銀色の短い髪が夜の闇で一層目立っている女の子は黒いワンピースと真っ黒な靴だけを身に着けていた。その、全てを黒で包んだ少女はやけに美しかった。最初はそれしか思えなかった。そして、少女の腕の中で全く動かないぬいぐるみ。

「どうしたんだい、おまえ。ご主人様はいないのかい？」

少女はぬいぐるみを撫でながらそう言っていた。そして、ゼロが近づいたのに気付いたのか、そっとゼロのほうに向き直った。

「そのぬいぐるみ、俺のなんだ」

「あ、すみません。そこに落ちていたから。でも持ち主が見つかって良かった」

少女の手からゼロの手へとぬいぐるみが移動する。少女はゼロを見ながら笑っていた。

「ありがとう、えっと」

「あ、申し遅れました。イヴと申します」

「イヴ。お礼に今から食事でも、どう？」

「いえ、そんな大層なことしていませんから。お礼だなんて」

「コイツは大切な奴なんだ。お礼は絶対にしたい」

「そうですか、でも今日は遅いからまた明日にでも」

その後、お互いのフォトンの自分のナンバーを交換し、別れ際イヴから一言。

「よかったら名前、教えてくれますか？」

「ゼロだ」

少女は小さく微笑み、また質問した。

「変わった名前ですね。そのぬいぐるみにはあるのですか？」

「こいつのほうが変わっている。ジブリール」

「本当に。面白い名前ですね」

イヴが笑うと、ジブリールはゼロの腕から飛び出し、イヴの目の前に立った。

「面白い名前とは失敬だな。この名前には誇りを持っているのだよ」
イヴは目の前のぬいぐるみが喋りだしたのに対して驚きを隠せないでいた。ゼロは素早くジブリールを持ち上げて口を塞いだ。

「ちよっと変わっていてさ、意思を持っているのだよ。コイツは」

「本当に面白いですね」

それから二人は程なくして別れた。あの後、イヴはジブリールのことをそれ以上聞こうとはしなかった。かなり珍しい生き物だが、召喚獣と間違えたのだろう。そのほうがゼロにとっても、ジブリールにとってもかえって都合が良かった。イヴもベルニカのどこかで泊まっている。観光客だろうか。この街では別段、女の子が一人で歩いているのも違和感はない。ゼロは帰り道、ジブリールにこう問いかけた。

「お前さ、約束くらい守れよ。何であんな所にいた？」

「野良犬との死闘の後、大橋で寝ているところを彼女に拾われたのだ」

ゼロは心の中でやはり、と思った。

「顔はかわいかったなあ、でも胸が全くなかった。残念だ」

「は？」

ジブリール曰く、彼女・イヴの胸はまったくないらしい。つまり「ぺったんこ」という事らしい。

それから二人は毎日のように連絡を取り合った。他愛のない話や日々の出来事を話し合った。暇なときは一緒にベルニカの街で遊んだりもした。ベルニカの街が昼から夜に変わるまでずっと二人で。

「今日は楽しかった。また、明日会える？」

ゼロのその言葉にイヴはすぐには返事をしなかった。時間をおいてからゆっくりと口にした。

「明日は、ちょっと用事があるから、もし会えるなら電話するね」

「ああ、わかった」

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

そして、二人は別れた。その後すぐにゼロのフォトンに連絡が入る。今回の任務の総司令官からであった。

ゼロとイヴと（後書き）

今回で第二話となった「二人の英雄と七人の道化

師と」で、まずは主要なキャラクターのゼロとイ

ヴとの出会いを書いたんだけど

この二人が最初に出会う場面が一番困った。

どう考えてもこれ以上は考え付かなくなった結果

ゼロが軟派なキャラになってしまった。

まあ、愚痴ってもしようがないので次回予告V（へーへ）V

「ゼロが討伐に向かったアルカディア軍。若き騎士ロ
ーランの指揮の下、一気呵成に攻め込む。しかし、

ゼロは戦場で意外な再会を果たす」

ファンタジアの英雄と強き騎士と

ウォーランド高地。すでにファンタジアの魔法使いや騎士たちは最前線にて陣を整えていた。ゼロはいつものように、どこにと決めることなく自由に座っている。この地へと出向く命令は出ているが、基本的に自由に戦えば良いと言われているからだ。

ファンタジアという種族は魔法を使う事に長けている。しかし、種族の全員が使えるわけではなく限られた素質のある者だけ使う事ができる。素質のある者は幼い時より魔法を習うために「アカデミー」に入学し、一人前の魔術師に成るために修練する。そして、ファンタジアのために戦う。使う事の出来ない者には、それぞれが自由に生活することが出来る。商業、工業、農業、自由だ。しかし、魔法が使えなくてもファンタジアのために戦う事もできる。それが「騎士」だ。基本的な剣術や武道を覚え、騎士の試験に受かることができる。誰でもなれるのだ。もちろん、魔法を使える者も「騎士」になる道を目指す者も多い。それが「魔法騎士」である。魔法騎士になれるのはほんの一握りのエリートだけである。

今、このウォーランド高地での総司令官がその魔法騎士である。名前はローラン。最年少で魔法騎士の名誉を授かった。ローランの命令で全ての兵が動き隊を形成する。その動きは鮮やかで一糸乱れぬ陣形となった。

「アルカディアはどうなっている」

ローランは側近の一人に話しかけていた。ローランのいる本陣はウォーランド高地の全てが見渡せる高い場所に設置されている。そこから側近は双眼鏡であたりを見渡している。

「見えました。前方、十里もありません」

「よし、進め！アルカディアを討つぞ！」

ローランは立ち上がり、剣を空高く突き出し、進軍を命じた。その令により、ファンタジアの兵は隊を乱さぬまま一気呵成に攻め込んだ。

アルカディアも戦闘態勢に入ったのか、空母も数機、空を飛んでいた。そこから投下される飛行型マシナリー。地面を駆り進んでくるのは最新型の兵器「EP・29」と呼ばれている人型のマシナリー。飛行型には有翼獣を召喚し応戦する魔術師。遠距離魔法を駆使しながらも撃墜していく。地上では騎士とEP・29との戦闘が各地で起こっていた。

アルカディアは空母からの爆撃や大砲からの攻撃で優位を保っている状態だった。ファンタジアは幾人も重ねた大型魔法陣で応戦するもアルカディアの大量兵器の前に押され気味である。

「加勢しないのかい？ゼロ」

「まあ、そろそろだな」

重い腰を上げ、一機の空母に向かい飛ぶ準備を始めた。地面に手を置き、直径1mの丸い魔法陣が完成した。それは小さくも緑色に光っていた。

「掴まれよ、ジブリール」

背中に光り輝く翼を創り出し空高く飛び上がる。瞬間、あまりの速さに空へ向かう一筋の光ができた。空母の目の前まで近づいたゼロは空母に手を添えて詠唱を唱えた。

空母が大きな爆発を伴い、墜落していった。燃えながら鉄の塊と化していく空母からは残りの飛行型マシナリーも出撃してくる。しかし、その全てが出撃してから間もなく爆発した。ゼロの放つ灼炎系魔法の最下級の威力が内部にまで及んでいた。

「ゼロが現れました。すでに空母一機を破壊しています」

進軍中のアルカディアの最後列にいるドルン中將は早々にゼロを討つ手配を始めた。

「残りの二つの空母もゼロに向かわせろ。何としても倒すのだ！」

その令を受けた空母はゼロに向かい舵をとった。雄叫びにも似た機械音を鳴らしながら目指すは空に浮かんでいる敵国の英雄。しかし、その英雄はまったく怯える事もなく逆にこちらを倒す気にいる。

「ジブリール、片方任せたぞ」

「はいよ」

フードから出たジブリールは空母に向かい飛んで行った。ゼロも空母に向かい再び魔法陣を描く。再び、緑色の魔方陣。そして四角、また一瞬で魔法陣が現れた。空母からはすでに何発かのミサイルがゼロに向かい飛んできている。それでもゼロは逃げようとはしない。ミサイルが魔法陣に当たる直前に、魔法陣から大きな風が生み出された。その風は空母に向かい一直線に進んでいった。ミサイルを爆破しつつ風は進んでいく。風は徐々に姿を変え竜巻のように螺旋を描き、空母を切り刻んだ。その中にいたマシナリーも切られた衝撃で爆発を起こす。その爆発がさらなる爆発を引き起こし空母を破壊した。

ジブリールのほうも空母を爆発させることに成功しゼロの元へ戻っていた。地上ではファンタジアの兵が歓声を上げていた。本陣でもそれは同じだった。握手をする者もいればゼロに向かい拍手をする者もいる。しかし、ローランだけは素直に喜んでいなかった。

最高峰の魔術師と最強の兵器と

一方、アルカディアのドルン中将は苦悶の表情を浮かべていた。空母を三機も失い、戦況は不利になるばかりであった。空からの攻撃が無くなったファンタジアはここぞとばかりに攻め続けている。EP・29も次々に破壊され徐々に兵士も少なくなっていく。

「私も出るぞ、このまま負けてなるものか！」

「ドルン中将、伝令が届きました」

「なんだ！申してみろ！」

伝令は持ってきたフォトンに記されている文面を読み始めた。

「こちらにリオール型空母一機と四足型マシンリー『SP・31』二十体。さらに例のアノ兵器も送ったとの報告です」

「本当か！これで勝機が見えてきたぞ！」

彼の言う勝機とはリオール型でも、SP・31でも無い。名前すら知ることのないアルカディア史上最強の破壊兵器である。

ゼロは空を旋回しながら地上の様子を見ていた。あきらかにこちらが攻め勝っている。こうなれば時間の問題であろうと思い、帰ろうとしたゼロを大きな影が覆う。上を見上げると新たな空母が浮かんでいた。それは先程の空母よりも明らかに大きなものだった。

「何でこんな所にリオール型が来るんだよ」

リオール型とは、アルカディアの作っている空母の大きさを示すもので、シャーレン、リオール、ガルキメニス、と三段階に別れている。これはいわば中型の空母である。そして、そこから新たなマシンリーが投下され始めた。

「おい、あれ『SP・31』だろ？試作機でも無いようだが、どうなってるんだ？」

ジブリールは投下されていくマシンリーに違和感を覚えた。確かにSP・31は未だ戦場での出撃例は聞いたことがなかったから当たり前だが、ゼロは投下されていた地上のほうが気になっていた。

「おかしい、あれほど攻めていたウチの兵達の進軍が止まった。ジブリール、兵達の最前列を見てくれないか？」

ジブリールの首根っこを掴んで地上に目を向けさせた。そこを見たジブリールはこう言った。

「変なのがいるぜ。どんどんコッチの兵を倒してく」

地上ではファンタジアの兵はたったひとつのマシナリーを相手にしていた。そのマシナリーは人型で頭部を守るヘルメット以外は、ろくに装備も付けていない。だが、誰一人そのマシナリーを止める事が出来なかった。

「ええい！情けない。私も出るぞ！」

戦場の様子を聞いたローランは痺れを切らし戦場へと赴いた。止めようにも一気に本陣を飛び出し、前線まで向かったのだ。ローランの魔法属性は風。通常、全ての魔術師は地、水、火、風のどれかに属することになる。それは自分との相性や才能により影響するものでそれは生涯変えることはできない。

風を操り、何よりも速く最前列へと向かうローラン。すでにSPー31により、兵達は列を乱し、個々に応戦していた。しかし、SPー31の力は圧倒的で一対一では勝ち目は皆無だった。ローランは進みながらもSPー31とも戦う。ローランは圧倒的な魔法と剣術で薙ぎ倒していった。そして、最前列のマシナリーの前までたどり着いた。

「俺が相手だ！こい！」

ローランは剣で斬りかかった。しかし、その兵器は避けようともせず、受け取ろうともせず、ただその身でその刃を受けた。その兵器の体には当たったが、切れることは無かった。ローランは再び力を込める。だが結果は同じだった。ローランは一步下がり魔法陣を描き始める。兵器はその魔法陣が描かれる前にローランの鳩尾に蹴りを入れた。軽い蹴りだったがローランは、後ろへと吹っ飛んだ。甲冑にもひびが入りしばらく動くこともままならなかった。近づいてくる兵器の存在を感じ、すぐさま立ち上がり、新たな魔法陣を作る。

それは「召喚魔法陣」で、自身に一体だけ従う事が許されている召喚獣を呼ぶため自分で決めた詠唱を唱えることにより姿を現す。

「数多の風を纏い、形ある物を切り続けよ。マエストラーレ」

翡翠の色をした獅子が魔法陣から現れた。大きな雄叫びを上げながら天を仰ぐ。その獅子の体毛は刃で形成されており、重なり合うたび金属音が響く。一気にその兵器に噛みかかろうと口を大きく開け突進した。噛み切ったかに見えたが口の中には何もなかった。その兵器は背中に機械の翼を展開させ大空高く飛んでいた。その翼は大きく広がり無数の光を放っていた。そして、その光は突然、無数の光線を打ち出した。その目標はローランとマエストラーレ。

一瞬の出来事だった。その光は召喚獣を強制帰還させるほどの威力を持っていた。地面にできた無数の穴。黒く焦げており、かすかだが火薬の匂いもする。ローランは大量の血を流し、倒れ込んでいた。意識はあり、天を見上げその兵器を睨んでいた。召喚獣が召喚師の意思に関係なく消えることを「強制帰還」と言い、召喚師の体力や魔力が極限まで減らされてしまうと起こる現象である。それは召喚師の死に近いことも意味する

光の放たれていた時、ゼロとジブリールは驚愕していた。

「おいおいマジかよ、レイまで搭載しているマシンリーがあんなに小型化になるのか？」

光粒子のエネルギーにより開発された兵器・レイ。光による攻撃のため回避以外で逃れる術はない。

「このままだとローランの奴、死ぬな。助けに行くか」

腰に携えている剣を抜き再び翼を拡げてその兵器に向かって行った。兵器はゼロの存在にいち早く気づき、立ち向かうべく照準をゼロに変えた。両者は空の戦場で刃を交える。兵器はレイの応用を使い

剣の形に固定させていた。

「落ちろ！」

水色の魔法陣を描き、数多の水弾を創り、発射させる。しかし兵器は全てを弾き返した。兵器はすかさず反撃の準備に出た。何処から出したのかわからないが、その兵器の周りに数百とも見える小型のミサイルが出現していた。兵器は手をあげ、ゼロに向かい手を下した。すると、一斉にゼロに向かいミサイルが動き出す。

「アイツ、いつの間に出したんだよ？」

ミサイルが飛び交い、爆発が起こる空を飛び続けているゼロ。ジブリールは振り落とされないようにフードに掴まっている。止むことのないミサイルの雨。兵器は次々とミサイルを飛ばしていた。回避するだけで精一杯のゼロの目前で強烈な発光が起こる。ミサイルの中に一つだけ閃光弾が混ざっていた。その隙にミサイルはゼロを直撃し大きな爆発が起こる。二発、三発、四発と止まないミサイルは次々とゼロに襲い掛かった。

兵器はミサイルを撃つのを止めた。爆煙で覆われたターゲットの生死を確認するためだ。曇っていてよく見えない。しかし、生命反応は感じない。死んだと思ったのか、兵器はミサイルを消した。現れた時と同じように何所にも収納される訳でもなくパツと消えていったのだ。腕に固定化したレイも消えかかっていた時、わずかに生命反応を感じた。完全に煙が晴れ、ゼロはいた。

「守護方陣・玉」

ゼロの周りには玉状の結界で覆われており、まったくの無傷だった。守護方陣とは、その名の通り防御するための魔法陣である。これを使っている最中は攻撃することは一切できない。攻撃に移る際の予備動作でさえできない。それ程、この魔法陣は神経を使うのである。

「ジブリール、用意はいいな」

「ああ、ばっちりだぜ」

守護方陣の内部でジブリールはゼロの右腕に乗っかる。ゼロは笑い、ある詠唱を唱えた。

「竜の森よ、住人であるゼロの声を聞け」

守護方陣が解放された瞬間、突風が巻き起こる。その中心を見据えた兵器の目の前にゼロが現れた。右肩に乗るジブリール。そこから先はゼロの腕ではなかった。真紅の鱗を身に付け五本の指から伸びている大きな爪は特徴的だった。

「紅竜・ヴルメリオ」

天高く掲げたその爪は紅い軌道を描き、兵器のヘルメットを目掛けて一気に振り下ろし、切り裂いた。

兵器の顔が徐々に明らかになるにつれ、ゼロは目を疑った。それはよく見てきたヒトだった。

「イヴ」

その兵器はイヴだった。

あの幼い、子供のようなイヴだった。

ぬいぐるみを抱えた小さな少女。

それがゼロの目の前にいる。何も分からなくなったゼロは動けなかった。

最高峰の魔術師と最強の兵器と（後書き）

二話続いて連載しました。

あまりにも戦闘の件が長いので二話にしました。

くちよつと補足く

ファンタジアは本文でも説明しましたが、騎士と魔法使い。それと魔法騎士が存在します。

魔法騎士はいわゆるエリートです。騎士と魔法使いの両方の課程を修了できないと成れません。

く召喚獣についてく

一人につき一体です。地・水・火・風により、様々な召喚獣を従えます。ローランのように戦闘系もいれば補助・偵察など種類も多々あります。

くゼロについてく

一言で言うところ「非常識」の存在です。地・水・火・風全ての魔法を扱い、四元素（地・水・火・風）の精霊

であるノーム・ウンディーネ・サラマンダー・シルフを扱っています。ジブリールは召喚獣ではありません
くアルカディアについてく

機械の種族であるアルカディアは様々な機械が存在しています。戦闘型と呼ばれる「マシナリー」や人に近い構造をしている「アンドロイド」の大きく二つに分かれます。このアルカディアにおいてもイヴは特別な存在です。長くなるので詳しくは次回に

一人の雑兵と一人の騎士と

ローラン率いる軍団は野営キャンプを張りながらアルカディアの軍の様子を見ている。

一般兵にとってはこの戦場での勝利が自国にどのような影響を与えるかなど知らない。村一番の剣の腕前でもこの国では下っ端もいところだった。この戦場にも頭数として集められたようなもの。強がりをして村を出てきた手前、そう簡単に帰れる訳ではない。どうにかして手柄を立てなければならぬ。しかし、配役は見張りばかり。これではいつまでたっても手柄を立てることは出来ない。

ふと、物見櫓から見える景色の中を何かが動いている。それが何かは分からない。けど確実にこのキャンプ地に向かっているのは確かだった。望遠鏡で見ても何かは分からない。ただ、自分の仕事だけを忠実に守ろう。与えられたのは近況報告のみ。しかし、連絡用のフォトン忘れてしまったことに気付く。周りを探すがどこにもない。仕方なく望遠鏡でその何かを追うことにした。

それはもう見えなかった。限なく探しても見つけることは出来ない。

そして、何かを考えていた矢先に大きな爆音が辺りに響いた。すさまじい爆音と共に数箇所設置されていた物見櫓が次々に破壊されていく。自分の乗っている櫓も例外なく倒されてしまった。

しばらく意識が飛んでいたが、辺りを見ると凄惨な光景が広がっていた。

何人もの魔法使いたちが召喚獣を出し、騎士たちは剣を抜いてたった一人に立ち向かっている。だが、その人間にとってはその魔法使いも騎士も雑兵同然だった。

召喚獣を一蹴し、強制帰還させる。たった一発、撫でたかのような力で、それでも召喚獣は一瞬で次々に消える。騎士たちは剣を粉

々に碎かれ甲冑さえもガラスのように簡単に壊された。

その人間は遊んでいるように見えた。次々と襲ってくる者たちなど自分を楽しませる道具にしか過ぎないというように。

やがて人手が足りなくなったのか自分と同じ境遇にいる雑兵も戦い始めた。剣も脆く。甲冑などを着させてもくれない雑兵が怯えながらも一人、また一人と挑んでいく。隊列や作戦などそこには無い。ただ、突進するだけ。

挑んでは倒れ、挑んでは倒れ。その繰り返しも長くは続かない。指揮官のいない雑兵など逃げるほうが多い。挑もうとした雑兵も剣を捨て逃げていった。とうとう自分一人になってしまったが、逃げることも挑むこともしたくなかった。ただ、その人間がどこかに行ってくれることを願うだけだ。

「そこにいるんだろ。出て来いよ」

どうやらばれていた様だ。抵抗もせず、言葉に従い、素直に立ち上がる。自分は目の前の人を見たことがある。

その人はゼロと呼ばれるファンタジア最高峰の魔法使い。一度だけだが対面したことがある。ただ、ゼロはこちらのことなど覚えていないだろう。こんなどこにでもいる雑兵のことなど。

ゼロはゆっくりと近づいていき肩を叩いて横を通り過ぎた。

「じゃあな、マルス」

ゼロが自分の名前を呼んだ。振り返ると遠くにあるキャンプの本陣に飛んでいた。すでに肉眼で捉えられないほど遠くまで飛んでいた。

たった小さな出来事。孤立してしまった部隊で負傷した自分を助けてくれた。その時にしたほんの少しの会話。名前と身の上を話した程度。なのにゼロは覚えていた。それだけで涙が止まらなかった。

破壊尽くされたキャンプ場には倒れている将校たち。燃えている木々。そして必死にも立ち向かっているローラン。額は割れて血が出ている。しかし、剣を握る手の力は衰えていない。そして、鋭い眼光はただ一人の男を見つめている。最も憎き敵を。

「ゼロ！貴様、祖国を裏切るのか！」

「裏切るわけじゃない。契約破棄だ。エリオットにそう伝えておけ」その言葉の後に続く言葉はなかった。ローランは殺すつもりで斬りかかり、ゼロはつまらなそうに避け続ける。勝負の分かりきっていることほどつまらないものはない。

指に何層もの緑色の魔方陣を重ね、徐々に力をためる。ローランの剣戟を交わし続けた後、一瞬の隙を見つけ、もう片方の腕で作った魔方陣をローランに向けて発動する。

「ドルミール」

両腕・両足・胴に呪縛の魔方陣をかけられ、身動きを封じられたローラン。一瞬のうちに五つもの呪縛魔方陣をかけるゼロ。人差し指の魔方陣をローランに向けて構える。

「トゥルボー・ガイ・ボルガ」

風を纏った一本槍はローランの鎧をいとも簡単に貫いた。

鎧は中心から破壊され、ローランの体中を激痛が走る。膝をつき、剣を落としたローラン。しかし、未だ眼光の鋭さは衰えてはいなかった。

「じゃあな」

ゼロはそのままどこかへと歩いていった。ローランは意識を失う寸前までゼロを見つめていた。

ファンタジアの騒動とアルカディアの珍事と

翌日からのファンタジア領域に配られた新聞の一面はゼロの消失を飾っていた。数々の戦役をもたらした英雄と謳われた男の突然の失踪。民も動揺していたが、一番動揺しているのは国王であるバンガーノであった。

「どういうことだ！なぜゼロは我々を裏切ったのだ」

テーブルを叩き、豪華な食事を気にせずひっくり返し、周りにいる神官に怒鳴りつけていた。

朝食を食べている間に不快になることをバンガーノは一番嫌う。今日一日の体調を決める重要な時間に不快になることは絶対に避けたことだった。あと二十年は王として君臨しなければならぬ。しかし、齢六十を超えるバンガーノもそろそろ王として限界を感じていた。

聞くところによるとバーディミアンの君主であるエリオットの失態らしい。バンガーノは手を大きく二回叩き最も信頼できる部下を呼び出す。

「お呼びですか？」

現れた男は燕尾服に身を包む細く、メガネをかけた青年。名前をタリスという。

「タリスよ、軍法会議を開く。主要都市に点在する十権天皇を呼び出せ」

十権天皇。ファンタジア種族の中で国王のバンガーノの下に集う十

人の権力者である。それぞれが領地を任せられ、その中心の都市に配属され、領地を治める役を担っている。間接的だが国王であるバンガーノと同じ権力を持つ。

「かしこまりました。早急に手配いたします」

タリスは両手から数羽の水色の伝書鳩を召喚する。十権天皇を呼ぶための手段は通常の「フォトン」を用いない。特殊な召喚獣を召喚することのできる魔法使い「サモナー」による伝書鳩での連絡である。タリスはそれぞれの伝書鳩の頭に自分の指をめり込ませ、情報を伝える。サモナーが仕える召喚獣は戦闘向きではない代わりに特殊な力を有している。この伝書鳩は水の分子で構成されているため、目的を果たすまで帰還することはない。

窓を開け、伝書鳩を放すタリス。そのタリスにバンガーノはもう一つ確認することを告げた。

「シュレンはどうしている？」

「御部屋で眠っております。ご安心ください」

「そうか、タリスよこの新聞を捨ててくれるか」

シュレンに新聞を見せるわけにはいかない。シュレンがこのことを知ると必ず何かをすると知っているからだ。

「かしこまりました」

「それと、騒ぎが収まるまでは絶対にあいつをここから出すな」

タリスは新聞を受け取ると小さく礼をして部屋を出た。

通路を歩いていると後ろからの声に気付く。自分と呼ぶ声に。

「よう、タリス」

「おはようございます。シュレン様」

タリスに話しかけたのはバンガーノの一人息子のシュレン。ラフな服装に髪型もボサボサ。あまり王の息子としての自覚を持っていない男。親の権力を良い様に使う勝手気ままな男である。

「さっき親父が怒ってたけど、何があった?」

「これを見れば分かりますよ」

そう言ってタリスはあっけなく新聞をシュレンに見せる。シュレンはその新聞を見た途端、何かを思いついたような笑顔をする。

「おもしろそうだな、アイツが逃げたのか」

シュレンは少しだけだがゼロと面識があるようだ。

「シュレン様、私にいい考えがあります」

タリスはシュレンの耳で何かを呟く。それを聞いたシュレンはさらに笑顔になる。

「さすが、タリスだな。よし、こうなれば今すぐ行くぞ。影武者と支度を済ましたら俺の部屋に来い」

「承知しました。シュレン様」

アルカディアでも同様のことが起こっていた。ゼロと同じ扱いを受けているイヴの失踪はやはり新聞の一面を飾っていた。

そして、やはり一番動揺しているのは現国王であるアリュトルムであった。しかし、バンガーノとは決定的に違うことがあった。

「おおお、イヴよ。どこに行ったのだい？」

アルカディアの空中浮遊都市ムーヴァ。その王族専用の宮殿の一室ではアリュトルムが泣きながら部屋の中を歩き回っている。国王の威厳は全く感じられない。幸い、神官もこの宮殿には入れないため、情けない姿を見せることはないが。

「なぜ居なくなるんだよおお」

「うるせえぞ、親父。イヴなら疲れたからその辺で寝てるんじゃないのか」

「どこだ。そこはどこなのだ！私が行って添い寝してあげよう！」

「知るか、このバカ！俺だって心配で昨日は寝られなかったんだ！」

アリュトルムと話しているのは息子のクリオスである。先程からの父の、そして国王としてはあまりに情けなさ過ぎる姿を見て怒りが

こみ上げてきている。

「まあまあ、兄さんも父さんもその辺にして。イヴだって女の子ですから何日か帰ってこないくらいで大袈裟ですよ」

二人をなだめるのは長女のマリセルア。しかし、父と兄というのは例外なく娘・妹の心配をするのは当たり前である。

「何日どころじゃないだろ！もう十日だぞ！まさか、男か？」

「な、な、なんだと！男だと！」

もはや完全に父と化しているアリュトルムの目は光を放ち今にもオーバーヒートしそうな勢いで怒りがこみ上げてきている。まだ完全と決まったわけではないのにかなり動揺している様子だった。

「いい加減にしなよ、それにイヴが居なくなった訳じゃないし、手掛かりも無いわけじゃないから」

隣の部屋から出てきた次男のオラキスは手にしている資料を見ながらそう言った。

「その手掛かりって何だ？教えろオラキス」

「イヴが消えた前日にいた街がベルニカらしい。まずはそこから探すべきだろ。当てもなくブラブラ変なところばかり探して」

父・アリュトルム、兄・クリオスと違い、オラキスは冷静である。とても親子とは思えないほど似ていないのである。

「他にはないの？オラキス」

「まだあるけど、とりあえずベルニカに行って何もなければまた言うよ」

「そうと決まればベルニカに行くぞ。子供たちよ！遅れを取るなよ」

完全にリミッターが外れたのかアリユトルムは何も考えずに飛び出していった。

それに続きクリヤオン、マリセルア、オラキスと順番にベルニカへと急いだ。

アリユトルム・クリオス・マリセルア・オラキス、そしてイヴは本当の家族である。しかし、一番初めに生産が始まったのはイヴだった。

最高級の素材を使ったイヴは工程に時間がかかりすぎ、イヴの材料の破片や部品から新たなマシンリーを作り出した。それがアリユトルムたちである。

実質、イヴが母親であるが、四体が造れてもまだ、イヴは動くことも出来なかったためこのような家族構成になった。この事実は神々意外誰も知らないことである。

最初の夜と旅の目的と

一方、世間を騒がせている英雄たちは両国の新聞の一面を飾っていることなど全く知らず馬車に乗り、当てもない道を揺られ続けている。

この旅に目的はない。ただ、行き着いた街に泊まり、遊び、また次の街に行く。その繰り返し。終ることの無いように。

日が暮れてからの馬車での移動は危ないと判断したため、今日は野宿することに決めた。二人と一匹はご飯を食べ終え、焚いた火を囲みながら他愛もない話をしていた。

ジブリールが馬たちに餌を与えている最中にゼロは思い出したようにイヴにある話をした。

「七人の道化師の話って知ってる？」

「道化師？」

「この世界に虹の色をそれぞれ持つ七人の道化師がいて何でも願いを叶えてくれるらしい」

「本当なの？ それ」

「絶対にいる。俺はそう信じている」

ゼロは迷いなく、そう言った。イヴもそれをただ、信じることにした。

「もしだぞイヴ。もし道化師を見つけて願いが叶ったら、どうする？」

「願いかあ、なんだろう」

イヴはゆっくりと考えている。ゼロもまた自身にもそう問いかけていた。少しの間を置いてからイヴが、あっと声を上げた。

「何か見つかった？」

「うん。けど秘密」

イヴは嬉しそうに笑い、口に指を当てた。その仕草はゼロにとってたまらなくかわいく見えた。

「ゼロは？ 願い事」

「俺も秘密。イヴが教えてくれたら言うよ」

こうして最初の旅の夜はふけていった。

道化師は踊り終え、ある本を取り出す。宙に浮かせ手を使わずにページをめくっていく。あるページを切り取り、本を消し去る。

神は世界における管理者を作り出す

神の代わりに世界を見届けるために

自身の感情を持たない道化師を

それすらも神の思い通りにはいかぬもの

それがあるから世界は愉快である

最初の夜と旅の目的と（後書き）

前回のちよつと補足

アリユトルム・クリヤオン・マリセルア・オラキス、

そしてイヴは本当の家族だけど、一番初めに生産が始まったのはイヴです。

最高級の素材を使ったイヴは工程に時間がかかります

ぎ、イヴの材料の破片や部品から新たなるマシナリー

を作り出した。それがアリユトルムたちです。

実質、イヴが母親ですが、四体が造れてもまだ、イ

ヴは動くことも出来なかったためこのような家族構成になっています。

旅人の街・ルーネルと最初の追っ手と

一行を乗せた馬車は最初の街へとたどり着く。

「旅路の出発地・ルーネル」

商業者も旅をする人も誰もがここで旅の準備をすることで有名な街、ルーネル。ゼロとイヴも例外なくここで準備をするため訪れた。

「イヴには食料と衣料を買ってきてもらおう。ジブリールにはその他色々頼む」

「うん、わかったよ」

「じゃあ買い物に済んだ者からこの場所に再度集合な」

イヴはメモを受け取り買い物に出掛ける。ゼロとジブリールはイヴが見えなくなるまで見続けた。

「ゼロ、本当のことを話してもらおうか」

イヴに聞かれたくない用件をジブリールは知っていた。ゼロは小さな袋をジブリールに渡した。

「トクという男の店に行って欲しい。場所は」

ゼロはジブリールの頭を触り、店の場所を教える。

「その袋を渡せば分かる。頼んだぞ」

「お前こそ、しっかりやれよ」

ジブリールはそう言い残し、人込みの中へと消えていった。全てをジブリールは理解している。追っ手が数人、こちらの様子を伺っている。逃げてから十日は経っているが、追っ手が来ることは予想以上に早かった。幸い、この街はハビリスの領地。表沙汰になるようなことはできない。しかし、いつまでも追われてはいけない。この街で処理するために、人気のない路地へと移動を開始する。

一定の距離を保ちながら追っ手はついてくる。数は多くなく、数人であることは足音で分かる。路地裏へと姿を隠すために角を曲がる。ゼロは立ち止まった。目の前は行き止まり。引き返せば追っ手と出くわす。足音が徐々に大きくなる。ゼロはひとつの魔方陣を描いた。

「どこに行った？」

角を曲がった追っ手達は目標を見失った。この角を曲がったのは確かである。行き止まり。空へ逃げたとは考えにくい。魔方陣を描いて空に飛ぶまで時間は掛かる。たとえゼロといえども飛行するなら周りの物は衝撃で吹き飛ぶだろう。しかし、壊れかけている樽でさえそのままの形を維持している。

「ゼロはどうした？」

次々に追っ手が行き止まりに集まる。手分けして辺りを調べるが、どこも変わりはない。ふと、追っ手の一人が地面に目を向ける。薄く、細長い線が微弱ながら光を帯びていた。よく見ると、地面に描かれているらしい。何も警戒することなく初めて見る物に触ろうとする。指が触れた瞬間、その線から強烈な光が発せられる。

「何だ！」

追っ手達は目を開けられないほどの強烈な光の中に包み込まれていた。

目を開けると、目の前にゼロが立っていた。場所は先程と変わらない路地の行き止まり。しかし、なぜか違和感がある。

「どこにいた？」

「別に、ずっとここにいたけど？」

「何をしたのかはわからんが、お前を連れて行くようにと命令されている」

追っ手達は臨戦体勢に入る。数は魔術師が四人、騎士が四人の計八人。一人の魔術師が自分の杖を召喚し、ゼロに向けて魔方阵を描く。しかし、その魔方阵は一瞬で消える。不思議に思った魔術師はもう一度描く。結果は同じだった。

「何をやっている。失敗するな」

他の魔術師も魔方阵を描くが誰一人として魔方阵を完成できなかった。リーダ格である男も同じだった。

「なぜだ、なぜ魔方阵を描けない。お前達も戦え」

騎士達も剣を抜こうとするが、柄から剣が抜けない。一体化しているように離れようとしないう。ゼロは未だに立っているだけだった。

「ゼロ、貴様何をした！」

「魔術師なら分かるだろ？空間転移だよ」

「空間転移だと？馬鹿げている。貴様に出来るわけがないだろう」

リーダ格の男・フラウンはいわゆる「反対派」の人間である。「反対派」とはゼロのことを認めていない人々のことを言い、ゼロを英雄と認めずに力も偽者と決め付けている人間たちである。

「そんなに言うなら空でも見てみるよ」

ゼロが空を指差す。フラウンも他の追っ手達も空を見上げる。空は青空ではなく、赤・青・黄・緑と様々な色が混ざり合った奇妙な色をしていた。そして、大きな魔方陣も描かれていた。それを見たフラウンは驚愕した。

「そ、そんなバカな」

「理解したか？ここは『ルーネル』と同じ物質から造った世界。つまり『別世界』だ」

空間転移。数ある魔法のうち、難易度が高い魔法の一つ。そのなかで最も難しいのは現実の世界の物を物質と考え、全く同じものを別の場所に造る魔法。通称「別世界」アナザーワールド。そして、更にそれを亜空間に造ることが出来る者は現在ゼロしかない。「別世界」を亜空間に造る場合、様々な制約をつけることが出来る。

「この世界では俺以外、戦うことは出来ないようにした。まあ、追っ手がお前達みたいに弱い奴らで助かったよ。強いとかかり難いかな」

フラウン達はようやくゼロの力を理解できた。フラウン以外の追っ手も同様に反対派であったが、徐々に自分達が間違いだと思い始めた。

「連れて行くと言ったが、俺を殺す以外でここから出られないから。相手してやるよ」

ゼロが手を叩く。それまで抜けなかった剣は抜け、魔方陣も描けるようになった。

「さあ、戦おうぜ」

「撃て！」

フラウンの号令とともに一人が水色の魔方陣を描き、水流を発動させる。道いっぱいの水がゼロに襲い掛かる。一足早く空に飛び、水をかわすゼロ。続いて二人目の魔法がゼロを追撃する。小さな火の粉が何十ともゼロを目掛けて飛んでいく。確実に当たったかに見えたが、そのゼロは幻影だった。フラウンは辺りを見渡すもゼロの姿が見えない。一人の男が地面に手を当て四角の魔方陣を描く。地系の魔法には地面から情報を得ることが出来るため、偵察に優れている。

「分かりました。この近くの大広場にゼロはいます」

フラウン達は大広場へと急いだ。ゼロがいることは遠くからで確認できる。フラウンは追っ手達に周り込むように命令した。

「逃げるのだけは得意のようだな」

フラウンはゼロの前に姿を現した。フラウンのほかは魔術師と騎士が一人ずつ。それ以外の五人はゼロの背後に位置している。大広場からいくつも道が伸びており、後ろからゼロを狙うことも容易に出来る。

背後にいる騎士が徐々にゼロに近づいてきている。フラウンの風の魔法により、少しだけ宙に浮きながらゼロに向かっている。

「お前の周りは隙だらけだ。どこから狙われるか、分からんだろう」

フラウンは気付かれないようにとゼロの注意を自分に向けている。騎士がゼロを斬れる位置へと辿り着いた。そして、剣を振りかぶりゼロにゼロに斬りかかる。ゼロは一步横に移動し、剣を紙一重に避ける。振り下ろされた剣は地面に刺さり、金属音が響く。騎士が剣を抜こうとする前に、ゼロは足で剣を破壊する。振り返り、騎士の胴に指を当て小さな緑色の魔方陣を描き、力を込める。騎士は一気に後ろへ吹き飛び、建物に激突し気を失った。他の騎士二人がゼロの左右から襲い掛かる。左右からの剣戟をしゃがんでかわし、二人の足を払う。体勢を崩し、倒れた騎士に追撃する。手を添え、魔方陣を描く前に背後から最後の騎士が斬りかかる。しかし、騎士が斬りかかることはなかった。後ろの騎士に気付いたゼロは振り返ることなく魔法による呪縛をかけていた。

「背後を取ったからって油断するなよ」

地面に手を置き、土色の魔方陣を描く。三人の周りを囲むような大きな魔方陣。その魔方陣一体の地面が噴きあがり、割れた破片が三人に直撃する。三人の騎士も遠くへと吹き飛ばされ気絶する。

残るのはフラウンを含め、四人。全て魔術師。距離を保って戦う以外に手段はない。しかし、フラウンの顔にはまだ余裕があった。最後の手段である魔方陣がある。おそらく、あまりの強大さにゼロ

は死ぬかもしれない。それでも構わない。

「もう諦めれば？ お前ら弱いよ」

「その減らず口を叩くのもこの術を見てからにしたらどうだ？」

フラウンたち魔術師は互いの杖を合わせ、ゼロに向ける。ゆっくりと詠唱を唱え始める。四つの杖から一つずつ魔方陣が現れる。赤、青、緑、茶色の魔方陣。それら四つはゆっくりと動き出し、次第に一つに交わる。そして、大きな白色の魔方陣が完成する。

「無属性の魔方陣か」

「知っているなら、この魔法の威力も知っているだろう」

地、水、火、風、それぞれの魔術師の力を均一に合わせることに
より、造り出される魔法、無属性魔方陣。一人でも魔法のバランス
を崩すと失敗する合体魔方陣の頂点。その威力は山一つを消し去る
ほどの威力を持つ。しかし、その強大な威力ゆえ弱点もある。

「どうした？ 早く阻止しなければお前が死ぬことになるぞ」

魔法の威力が最高潮に達するまでの間、四人の術者は無防備にな
る。そこに小石一つでも誰かに当たれば魔法のバランスは崩れ、大
爆発が起こる。

「待っていてやるよ。俺を倒したいのだろう」

「その笑みを、今すぐ消し去ってやる！」

魔方陣から白色に光を発した魔法弾が轟音と共にゼロに襲い掛かる。ゼロはゆっくりと指を広げ、親指以外で魔方陣を描く。それは一つではなく先程、フラウンたちが描いた四つの魔方陣全てと同じものだった。その魔方陣は一瞬の内に一つに交わり白色に輝く。そして、同じように魔法弾を放つ。二つの白い魔法弾は互いに衝突し、やがて消滅していった。

「な、何が起こったのだ。どういことだ」

普通、魔法が衝突し合えば弱い魔法が消え去るか、爆発を引き起こし互いに消滅する。フラウンは事態をうまく飲み込めなかった。

「相殺って知っているか？アレと同じだ」

「バカな、無属性魔法だぞ。それを貴様一人で相殺しただと」

「そうだけど」

余りにも呆気なく言うその一言にどれだけの重みがあるのかゼロは自覚しているのだろうか。ゼロにとって魔法は呼吸と同じような存在だった。フラウン含め、魔術師たちは目の目の敵に立ち向かう自分達がいかに愚かな存在かというのを感じた。ゼロにはどんな魔法も通用しない。

「殺せ」

フラウンの口からその言葉は自然に漏れた。もはや敵わぬ相手に死すら覚えていた。それを聞いたゼロは何も言わぬまま、指を鳴らす。すると、街の景色にひびが入りガラスの破片が飛び散るようにして景色が変わっていく。

変わったのは空の色。青空に雲が流れている。ゼロが「別世界」を解除し、先程までいたルーネルへとフラウンたちを帰した。倒れていた騎士達も無傷だった。ゼロはそのままフラウン達を通り過ぎた。そのとき、フラウンはゼロのほうを向きこう言った。

「なぜ、殺さない？」

「自分の命は大事にするものだ。それに、お前らにだって両親はいる。その人達まで悲しませたくない。ただ、それだけだ」

フラウンは何も言い返せなかった。ただ、去り行くゼロの背中を見ているだけだった。

ジブリールは、予定通りトクの店へとやってきた。人通りの多い道の、たった一つだけ閉まっている店。店を営業していないのではなく、一般の客の来客は有り得ない。ジブリールはゼロからこの場所の地図を教えてもらうとき、この店への入り方も学んだ。一見、普通の店の扉に見えるが、この扉を開ける者はいない。「CLOSED」の看板があると、誰もこの扉を開けようとはしない。鍵すら存在しないこの扉は「物質透過」の魔法がかけられている。どのような種類でも構わく、一つの魔方陣を描けば「物質透過」の魔法が発現する。ジブリールは扉の前で小さな魔方陣を描く。すると、扉が呼応するかのように、音を鳴らす。その音を聞いたジブリールは扉の奥へと進んでいく。

「おやおや、かわいいお客だ」

カウンターに座る店主は若く、新聞を読みながらジブリールを見る。店内は何も置いていなく、奥にカウンターがあるだけの長い店

だった。カウンターの上に乗り、ジブリールはゼロから貰った小袋を店主に見せる。

「アンタ、ゼロの使いか」

「この袋を渡せば分かるとゼロから聞いている」

「ちょっと待ってな」

店主はそのまま店の奥へと姿を消した。数分後、戻ってきた店主からジブリールは意外なものを渡された。

「こいつは、何考えているんだゼロは」

「理由はどうであれ、その袋を見せられたらコレを出すようにゼロから頼まれていてな」

「わかったよ、ありがとう」

集合場所に二人と一匹が集まる。一番遅かったゼロにイヴは心配していたが、道に迷ったとゼロは何気なく言った。目的も達したところで新たな街へと向かう。ルーネルの街を出るとき、ジブリールはゼロに話しかけた。

「ほれ、約束の品物だ」

ジブリールはゼロに小さな紙切れを渡す。これがトクの店で貰ったもの。この紙切れは二人にしか真の意味は分らない。

「いつか使うときは来る」

「それで、追っ手はどうした？」

「逃がしたよ。でももう追ってこないだろうし、ひとまず安心だ」

「そうか、なら大丈夫だろう」

そして、一行は次なる街を目指す。

ティエラの到着と一人歩きする噂と

都市バーディミアン。ここに一人の男が現れる。名前はティエル。背は高く、体が細い。特徴的なのは長髪のオールバックと右頬の菊の刺青。今回、ある目的でここに呼ばれていた。

ヴァルハラ王座の間。ティエラは頭首のエリオット直々に招集された。

「ティエラよ、お主にはある重大な任務に就いてもらう」

「はい」

「任務の内容は指名手配犯であるゼロの始末だ」

「わかりました」

「今回の任務には少数で行ってもらおう。お主が小隊長となり隊員数は五人とする。その中にこの二人を入れてもらう」

後ろの扉が開き、二人の男が姿を見せる。カルヴァンとローランだった。

「本人たちの強い希望もあり、私が推薦した。残りの二人は自由に決めてくれ」

王座の間を後にしたティエラは騎士の修練場へと赴く。カルヴァンとローランもその後ろを付いて行く。向かったのは修練場の中でも一般の兵士たちが鍛える大広間だった。そこに腰を据え、訓練に励む騎士を見つめることにした。ティエラのその姿を見てローラ

ンはこう言った。

「なぜ、聖堂へ行かないのですか？」

その言葉の意味はカルヴァンも理解していた。このバーディミアンでの修練場は一般の騎士が修練を行う大広間と戦場で数々の功績を残した者しか入ることの許されない聖堂がある。任務の編成でも最初に聖堂から人員を選ぶ。少数部隊なら尚更だ。

「何でお前らがいるんだ？」

素っ頓狂な台詞に二人は硬直した。何を言っているのか理解できなかった。

「残りの奴なら俺で決めるから」

その言葉を言われた二人はその場を去ることにした。

「まったく、よく分からない奴だな」

ティエラを知る者は少ない。使う魔法も、従えている召喚獣さえ見たものはいない。ティエラ自身を見た者も少ない。ただ、ある一つの噂だけが流れている。

「ゼロにキズをつけた男か…」

その言葉通りの噂だった。それだけが一人歩きしている人物のようである。

「俺は認めない。あんな男に、そんな力はない」

ローランも噂は聞いたことがある。それが事実と思った時もあった。しかし、実際にゼロと対峙してみて傷を負わせることなど不可能と感じた。

数時間後、ティエラからの召集により、元の大広場へと戻るローランとカルヴァン。ティエラの横には、明らかに雑兵だとわかる二人が立っていた。

「紹介する。マルスとアリエルだ」

ローランは目を疑った。平凡な騎士と魔術師。そして、魔術師は女。明らかにおかしい部隊編成だった。

「この二人に依存がないなら、今日は解散だ。後日、出発の連絡を入れる」

ローランとカルヴァンが何も言わないところを見るとティエラはマルスとアリエルを連れて帰ろうとする。振り返るティエラの首筋にカルヴァンは剣を向ける。

「この二人のことなどどうでも良い。ただ、お前に対して意見がある」

「なんだよ？」

「お前が隊長の資格があるかどうかを試させてもらう。いいな」

ローランも同意見だった。雑兵のような二人などこの際どうでも良い。ティエラ自身に不満があった。

「いいけど、俺、強いよ？」

そんな言葉で脅されるカルヴァンではなかった。場所は大広場。修練中の騎士もその対決を見ようと周りを囲んでいた。

噂が一人歩きする男ティエラとエリオットの側近で「無音」と呼ばれているカルヴァンの対決だった。

シャクラムスと男の噂と

朝日が昇る前に、一行は旅立った。次なる街を目指して

「聖都市シャクラムス」ファンタジア領地

由緒あるカリム家のリヒル卿の納める都市。ファンタジア十権天皇の一人であるリヒル卿は威厳があり、ファンタジア領地での統治力が随一である。犯罪率も少なくなっていく。しかし現在、リヒル卿はバーディミアンに招集されているため都市内では少し不穏な空気が流れていた。

街の一角に飲食店で食事をしているゼロ達。ゼロ達のような外部のものでもこの都市の空気に違和感を覚えた。何かが起きるような予感さえ出来た。

勢い良く店のドアを開けたのは大きな体格をした男だった。その後ろの数人の連れを引き連れ店の中へと入ってくる。

「おい！酒だ！」

怒鳴り散らすような声でそう言い、席に着く。店のウェイターは大きくで大量の酒を持ってくる。他のウェイターも次々に料理を運ぶ。

「なんだ？あいつら」

「ここら辺を仕切っているギャングですよ」

水のお代わりを持ってきた店主はゼロにそう言った。

「リヒル様がいる時は目立った行動をしてなかったけど、いなくなつた途端調子付いちゃって」

「リヒル？ここを収めている十権天皇の？なぜいないんだ？」

「何でもバーディミアンから招集がかかったらしくてね」

ゼロは、自分が絡んでいることを感じた。国王バンガーノだろう。ファンタジアではよほど大事として扱っているらしい。しかし、当の本人はそんなことなど気にも留めていない。

「それより聞いたか？あいつの噂」

先程の男連中の話がある話題で持ちきりになった。

「ああ。『紅い男』のことか？聞いた、聞いた」

「何だ？『紅い男』って」

店主の話によると、ここ数日各地で相次いで盗賊による被害が起きている。貴族や地主などの資産家のみを狙う盗賊で紅い衣装に身を包み、紅いマントを羽織っているため『紅い男』と呼ばれている。その『紅い男』がこのシャクラムスにいるとの噂が流れているらしい。そして『紅い男』が狙っているターゲットは。

「やっぱカリム家だろうな」

偶然、店主の話と男連中の話が重なった。この都市において、カリム家の存在は圧倒的であり、当然『紅い男』の標的となるであろう。このシャクラムスにおいてカリム家以外には資産家と呼べる家柄

は存在していない。これはリヒト卿の政策であり、一つの王族が他の住民を統治するため、かつて資産家と呼ばれた一族たちの財産をカリム家がコントロールするようになったのであった。その代わりに犯罪数が少なくなったのである。

リンガーと謎の声と

夕暮れ時、予約の取れた宿屋の一室。一部屋しか予約が出来なかったためゼロとイヴは二人で一つの部屋に泊まることになった。

「『紅い男』か」

ゼロはあまり気にも留めずに独り言のように言いながら自分の荷物を漁っている。反対にイヴのほうはベッドの上で枕を抱きながら少しだけ緊張しているようだった。

何か話していないと気まずいと思ったイヴは先程の独り言に返事をしてみる。

「何か思い出したの？」

「確か持ってきたはずだけど」

「何か探しモノ？」

イヴが寄っていくと突然、しまったと大きな声を上げて立ち上がった。イヴは驚き、身を縮めながら聞く。

「何か忘れたの？」

「『七色の道化師』に関する書物を忘れた」

頭を抱えたゼロの視線は、気持ちよさそうに眠っているジブリールに向けた。

「おい、起きろ！」

ジブリールを天高く持ち上げゆすり起こそうとするゼロ。

「なんだよ、人が気持ちよさそうに寝ているのに」

人かどうかは分からないが、とにかく機嫌が悪そうだった。

「『七輪の書』を忘れた。取りに行ってくれるか？」

「ヤダね」

頭ごなしに否定するジブリール。ゼロの言い分など絶対に聞かないという姿勢を示している。しかし、ゼロは絶対に引こうとはしない。

「無事に持ってきたら、イヴと一緒に風呂に入れてやる」

その言葉を聞いて、ジブリールの様子が変わった。ゼロの腕を振り解き、肩に乗る。

「その話、本当だろうか？」

「ああ、約束する」

その言葉を聞いたジブリールは肩から降りると窓を開け、羽を広げる。

「いつもの場所においてあるんだろ？」

「そうだ、なるべく早くな」

ジブリールは当たり前だ、と言って飛んでいった。

夜も深まり、すっかり辺りが闇の染まりきった頃になるとゼロはイヴと二人でベランダに出ていた。風が心地よく吹いており、時折顔に当たる風が気持ちよかった。ゼロはタバコを吸い、空を見上げていた。

「風が気持ちいいね」

「そうだな」

イヴの言葉に何気なく答えたゼロ。イヴはまだ緊張しているのかゼロを直視できず会話をしようと必死で言葉を探す。ただ、今更話すことはなく沈黙が続いてしまう。ゼロは考え事をしているのか、空を見るばかりでイヴのことなど眼中にもない様子だった。

「ん？」

ゼロはあるモノに目に入った。この街の中心に位置する時計塔だった。その時計塔の天辺、男が座っていた。その男は立ち上がり周りを見始めた。

風が強く吹いたとき、その、天辺にいる男から何かが大きく揺れていた。それはマントのように見えた。その直後に、その男は大きく上へと飛び上がった。ゼロはその男を目で追った。すると、男は大きな魔方陣を時計塔に向けて作り出した。その魔方陣が何かを判

断したとき、すでに遅かった。大きな光が時計塔を包み込み激しい爆音と共に時計塔が燃え上がった。

焦げ臭い匂いが伝わってくる。時計塔は支柱を残し、飛び散った破片から火の手が広がっていく。人々の悲鳴が徐々に聞こえ始めてくる。気付けば、都市は火に包まれていた。

空では腹を抱え、笑い込んでいるこの惨事の犯人がいた。ゼロは何の躊躇いもなくそこへ飛んでいく。ゼロに気付いたのか、男は笑いを止め、ゼロのほうを見る。ゼロは男を見て一つ気付いた。

「『紅い男』というのはお前か？」

小柄な体格をしている男だった。顔もまだ幼く、成人には見えなかった。服装は上から下まで赤一色。そして、真紅のマント。直感で理解していた。

「まあね、本名はリンガー・ノイト」

「何をしているのか解っているのか、お前は」

「楽しいだろ？人々の泣き喚く顔を見るのはよ」

ゼロはその言葉を聞くなり殴りかかった。拳は空を切り、紙一重で男はかわしていた。

「危ない、危ない。けどね、たとえアンタと戦っても、俺は絶対に負けないよ」

その言葉を聞いたゼロは拳を収め、ある質問をした。

「たいした自信だな。よほどの間抜けか」

「アンタ、ゼロだろ。それぐらい知っている」

ゼロ自身、奇妙な感じがした。自分のことを知っているのに闘いを挑んでくる奴は誰一人としていなかった。

「アンタを倒せる力。俺にはあるからね」

リンガーはゼロに向かって真っ赤に染まった両手の掌をゆっくりと広げた。リンガーの掌から魔方阵が現れた。それが何かをゼロが知った時には遅かった。すでにその魔方阵の能力がゼロの動きを封じていた。

「じゃあな、優れた魔術師さん」

詠唱とともにゼロを中心とした爆発が起こる。ゼロはそのまま燃え上がった街の中へと落ちていった。リンガーはそれをゆっくりと見続けていた。頬を少しだけ緩ませながら。

燃え上がる街に人の気配はしない。逃げ遅れた人々はいないようである。イヴは無事に非難することはできただろうか。ゼロは自分のことよりもイヴのことが心配だった。しかしゼロは、地面に倒れこんだまま動かなかった。赤色の魔方阵。確かに炎熱系の魔方阵であるが、ゼロはあの魔法陣を見たことがなかった。全ての魔法に精通している自分が知らない魔法。明らかにこの世のものとは異質のものであった。あの魔法陣の正体が分かるまでは下手に動かない方が良く、ゼロは判断した。

一方、未だ上空に浮いたままのリンガーは打ち震えていた。ファントジアの英雄に、自分が攻撃を与えることが出来たことに驚いていた。やはり、この力は無敵だ。この力があれば、もはや自分に敵はいない。自然と笑みがこぼれた。

高揚感に浸っているリンガーの横を強風が通り抜けた。リンガーはそれに対し何も思わなかった。ただ、リンガーの背後からある声が聞こえた。

「下ヲ見テミロ」

言われる通りに下を見ってみる。ゼロが立っていた。そして、こちらを見ているようだ。あまり負傷しているようにも見えなかった。やはり、この程度では倒せる相手ではない。

「なるほど、さすがは英雄だ」

リンガーはゼロの方へ向かおうとした。その時、またしても同じ声が聞こえた。

「ソツチデハナイ。今度ハ、後ロダ」

リンガーはその言葉で後ろに振り返った。そこには緑色の宝石が空を漂っていた。

「何だこれ」

リンガーは警戒をせず、躊躇なく宝石に触れようとしていた。しかし、声はリンガーよりも早く宝石の正体に気付き、注意を促す

「ソレニ触ルナ」

その瞬間、緑色の宝石から魔方阵が現れる。この宝石は魔力を帯びており、術者の詠唱により魔方阵を発現させる「飛宝石」であった。術者が遠くにいても魔方阵を発現させることが出来る。

「フェートル・サンタナ」

巨大な暴風が現れリンガーを襲う。避けるこの出来ないリンガーは地面へ吹き飛ばされる。ゼロは地面へと一直線に向かうリンガーを見ていると、リンガーの周りに何かが纏わり付いているのに気付いた。目を凝らして見てみると、人の腕のようなものが見えた。

「アイツには何かが取り憑いている。かなりヤバイ感じだ」

ゼロは、自分が見たのは間違いでないと確信した。

闘いの決着と

徐々に地面に近づいているリンガーは別段、取り乱している訳でもなかった。むしろ余裕さえ見られる。

「どうする？ やっぱり戦う？」

リンガーは声に語りかけた。

「当たり前ダロ。アイツハ危険ダ」

「そうと決まれば反撃するか」

地面に直撃する寸前で、リンガーの落下スピードは急ブレーキがかかったように止まった。そして、ゆっくりと地面に降り立った。依然、ゼロの目にはリンガーの背後にいる亡霊のようなものが見えている。形がはっきりとしておらず蠟燭の火のように揺れ動いている。

「それが、お前の力の正体か？」

ゼロはリンガーの背後を指差して言った。リンガーは後ろを振り向き、なんとなく理解したのかこう告げた。

「コレ、見えているの？ やっぱり英雄と言われるだけあるな」

リンガーは依然、軽い笑みを浮かべながらゼロを嘗めきった態度を取っている。

「見えていても、絶対アンタには負けないよ」

「そうか、なら少しだけ本気を出そう」

ゼロは腕を前に出し手を組み詠唱を唱える。ゼロの下に魔方陣が出来上がる。

「何ダ、アレ」

声の主はその魔方陣に違和感を覚えた。魔方陣の文字列などを知っているが、色が奇妙だった。黄色の魔方陣など見たことがなかった。

「行くぞ」

その言葉の後、ゼロを見失った。リンガーは周りを見るが、どこにもいない。突如、家の壁に亀裂が入る。それも一つではない。今度は反対側の壁に亀裂が入った。徐々に亀裂が増えていく。

「何が起こっているのだ」

リンガーが一步足を下げた瞬間、地面にも亀裂が入った。声は何が起きているのかを徐々に理解し始めた。

「空ニ飛べ」

リンガーは言われた通り、空へと飛び上がった。地上にはゼロの姿は見えない。

「どこに行った？あの野郎」

声はリンガーなどにも目をくれず地上を見つめ続けていた。無数の亀裂、その亀裂に小さいながら硝煙が立っていた。それを見たとき、声は全てを理解した。しかし、リンガーはまだ気付いていない。早く伝えなければならぬと思った瞬間、リンガーの目にゼロが映っていた。自分の目の前にいる。リンガーは間髪いれずに殴りにかかった。ゼロは一瞬のうちに背後に回った。両手を組み頭上高く掲げリンガーの頭部へと振り下ろす。防御する術もなくリンガーは地面に叩き落される。リンガーの体に殴打以外に電撃のような衝撃が走った。必死に体勢を立て直し着地しようと試みる。それすらもゼロに見抜かれていた。再び目の前に現れたゼロは両の拳を握り締めていた。

「腕ヲ前ニ出セ！」

リンガーはゼロに恐怖を覚えた。体が固まって言うことを聞かない。声はゼロの能力が全て分かっていた。しかし、声自体には何も出来ない。リンガー自身が対応しなければならない。それが出来ない状態である。

「オラオラオラァ」

すさまじい速さのラッシュをリンガーの体に打ち込む。悲鳴を上げる間もなく壁に叩きつけられたリンガーは口から血を吐き、地面に倒れる。骨が数本折れるほどの衝撃だった。瓦礫をどかし、必死に立ち上がろうとする。体を起き上がらせたリンガーの目の前にゼロが立っていた。冷酷な目をしており、ゴミでも見るかのような目で見ている。完全に腰が抜けたリンガーは必死に後退りをする。無言で首を横に振りながら

「どうした。俺を倒すのだろう」

「もう、止めてくれ。骨が折れた。俺の負けだ」

「勝ちとか負けとかそういう問題じゃあない。お前は裁かれなければいけない」

やめてくれ、お願いだ。必死に命乞いをするリンガー。

「お前にいくつか質問がある。しっかりと答えろ。まず今まで何人、殺した？」

「千人以上は……殺してきた」

「次の質問だ。その力はどこで手に入れた？」

「二ヶ月前位に……奇妙な男に出会ったのだ」

「奇妙な男？」

「ああ……変なメイクに道化師のような真っ赤な服装をした男だった」

リンガーはそのことについて全てを話した。

夜、いつものように仕事から帰ろうとしたとき、目の前にその男は現れた。怖がらなくてもいい、私は君と友達になりたい。男はそう言ってきた。リンガーは理由も分からず、その男に恐怖した。そして、その場から逃げだした。しかし、どこに逃げても男は自分の目の前にいた。リンガーは恐怖以上のものを覚えた。男は口を開きこう言った。リンガー・ノイト君、仕事をしながら盗みや詐欺紛いのことをして生計を立てているね。女房や子供に暴力を振るい、

酒におぼれる毎日。その生活に満足を覚えている、そんな腐った自分が好きなのだろう。なぜかその男は誰にも話したことの無い自分のことを知っていた。徐々に男は近づいて顔を優しく掴み、続けて言った。しかし、その反面自分を変えてみたいと思っている。どうだい、私と友達にならないか。リンガーは自分にさえ恐怖を覚えていた。次の瞬間、腹に衝撃が走る。男がナイフを刺していた。腹から溢れる血で現実に戻ってきたかのように大声を上げて叫んだ。男に殴りかかろうとしたが、その男はどこにもいなかった。周りを見てもいつも　のように静寂な夜だった。腹から血は出ておらず、ナイフの切り傷もなかった。それからリンガーの体に異変が起きたという。まず、自分の体が若返っていった。そして、知らないところから声が聞こえ、自分の力以上に何でも出来た。家々の上を自由に飛ぶことも出来た。自分の倍以上の岩さえも簡単に砕けた。それから妻子を殺し、犯罪に手を染めていった。

「なるほど、その力は奇妙な男のせいということか」

自分のことをすべて話した。だから、助けてくれ。リンガーは最後の命乞いを始めた。

「最後の質問だ。お前はそう言ってきた人間に、何をした？」

手を前に出し、魔方陣を造り、詠唱を唱える。リンガーは逃げようとするが後ろ壁で逃げることは出来なかった。

「おい！どこにいる！返事をしてくれ！俺を助けてくれよ！友達だろ！」

どうやらいつも聞こえてくる声に助けを求めているのだろう。しかし、遅かった。

「ボルテック」

リンガーを電撃が襲う。悲鳴を上げながら倒れこむリンガー。黒く焦げ、焼けた匂いが辺りに漂う。もはや人の形を留めていなかった。

紅色の道化師と

突然、後ろから手を叩く音が聞こえた。振り返ると男が一人立っていた。道化師のような真っ赤な男。リンガーの言っていた男にそっくりだった。

ゼロは気付いていた。この男こそ、リンガーの力の元凶。そっくりではない、コイツだ。指先に力を込め、男に向ける。

「待て、待て。私は君の敵ではない」

男はそう言い放ち、徐々に近づく。

「動くな、それ以上近づいてきたら撃つぞ」

ゼロの指先は、男に向けられたままだった。

「私はね、常に強い者の味方だ」

ゼロの警告を無視して、男は一步足を進めた。それをゼロは見逃さなかった。躊躇せず、空気弾を放つ。それは男に当たらなかった。男の体をすり抜け、後ろの壁が壊れた。なぜか、男には命中しなかった。ゼロは目を離さずに距離を取った。

「賢明な判断だ。一回当たらなければ何回撃っても当たらないもの。戦闘慣れしているようだね」

ゼロは確かではないが、男の正体が分かりかけてきた。リンガーの体に起こった出来事。明らかに異質な能力。実在しない存在。最後に後一つ。

「ひとつ、聞いてもいいか？」

「質問の多い方だ。何でしょうか？出来る限り答えますが」

「なぜそんなに真っ赤な衣装を着ている？好きだからか？」

「ええ、そりゃあもう。何よりも赤をこよなく愛していますからね」

その言葉で確信した。

「お前は『七人の道化師』か？」

それを聞いた男の表情が変わった。真剣な顔つきとなりこう言った。

「よく、ご存知ですね。私のこと」

「道化師の格好をして、その衣装の色が何よりも好き。そして、この世に存在しない存在。それが『七人の道化師』なのだろう」

「そこまで知っていましたか。しかし、その事をどこで？」

「『七輪の書』に全て書いてあった」

男は腕を組み、少しの間考え始めた。ゼロには聞こえない声で呟いた。ヴァン新族か、と。

「あの書物を持っているとは、よほど高貴な方と見受けられる。どうでしょう？私を扱ってみはいかがですか？」

「願いが叶うのか？」

「良くご存知で。しかし、いささか解釈がずれていますね。願いを叶えるのは全ての道化師を集めなければなりません」

「七輪の書」に書いてあった事と、この男の話の辻褄があった。本当に願いが叶う。ゼロの旅の目的が目の前にいた。迷うことなく男に告げた。

「いいだろう。交渉成立だ」

「では、契約の簡単な説明を。私を扱うと決めたら死ぬまで一緒に存在します。それでも、良いと？」

「ああ、かまわない」

その言葉を聞いた男は手を天に向け、呪文を唱え始めた。全く聴いたことのない言語だったため、ゼロには何を言っているのか分からなかった。そして、男から強烈な光が発せられた。目を背けたゼロの脳裏にある声が聞こえてきた。私たち七人は、ある感情を司っている。私は、憤怒。つまり、怒りを司っている。それを良く覚えていようように。

街を守った結果と

ゼロが目を覚めたのはベッドの上だった。小さな部屋でベッド以外に何もない。予約していたホテルではない。辺りを見渡していると、目の前の扉が開きイヴが入ってくる。

「起きた？もう大丈夫？」

イヴの話によるとゼロは道端で倒れこんで気絶していたらしい。火事の被害は大きく、都市の三割が灰と化してしまった。現在でも救助活動は行われている。ふと、話をしているイヴの表情が少し曇る。

「どうかしたか？」

「あのね、ゼロと話したいって人がいるの」

扉が開き、男が入ってくる。白色に輝くマントを羽織、厳粛な衣装に身を包む男にゼロは見覚えがある。

「リヒル」

「久しいな、ゼロ」

男はシャクラムスを統治しているリヒル卿だった。部屋に入ってきたリヒルはゼロに話の内容を告げた。

「お前が、ファンタジアから指名手配されている」

その言葉を聞くまで、ゼロは自分のした事が祖国にどれだけの影響が出るかを知らないでいた。いや、知っていたが、認めたくなかったのだ。

「やっぱりか」

「懸賞金は三億。国家反逆罪の罪では最高額だ」

「それで、俺を捕まえに来たということか」

「お前が、ただの反逆者だったらな」

それはまるでゼロを捕まえられないような台詞だった。

「少なくとも、お前はこの街を救ってくれた。そのことは感謝している。ついて来て欲しい」

リヒルはそう言い残し、部屋を後にした。ゼロとイヴは何も言わぬまま、リヒルの後を歩いていく。

部屋を出て、外に続く扉を開けたリヒル。

「お前の目で、自分のした事を確かめろ」

言葉の意味を理解せぬまま、二人は外に出た。そこには、想像できかない光景があった。

たくさんの人が集まっており、大きな歓声と拍手が鳴り響いていた。けがをして包帯を巻いている者でさえ喜びに満ち溢れた顔をしている。その歓声と拍手はゼロとイヴに向けられていた。

ありがとう、聞こえてくるのはその言葉。自分が反逆者であると知りつつも笑顔で御礼を言っている。

「この街にいる間だけお前は街を救った英雄だ！誰も捕まえたりはしないぞ！」

歓声の中からそんな声が聞こえた。ゼロの肩に手を添えるリヒル。

「お前を捕まえるわけがないだろう。たとえば、俺が捕まえようとしても街の皆は反対する。この街にいる間は安心すればいい」

リヒルの言葉はゼロの胸の奥まで響いた。こんなにも人から感謝されたことはなかったから。ゼロはただ、嬉しく思うだけだった。

「ありがとう。でも、俺にはやりたいことがあるから。この街には長く居られない。すぐに旅に出るさ」

「そうか、なら見送りだけでもさせてくれ」

ゼロとイヴの後ろをリヒルが歩き、その後ろを街の人々が歩いていく。ゼロは振り返らずにシャクラムスから出ることにした。リヒルを含めた街の人々もシャクラムスからは出ない。去り行くゼロの背中、中にリヒルは叫んだ。

「ゼロ！体には気を付けろよ」

ゼロは何も言わぬまま、手を大きく振った。それから再び大きな歓声が上がった。

シュレンと殺し屋と

シャクラムスよりも南にある小さな街、ラクアン。ベルニカと肩を並べる三大娯楽都市のひとつだが、ベルニカのようにカジノなど賭場主体ではなく、レジャー施設やスイートクラスのホテルなど高級なイメージの街。そのラクアンの中でも一番大きなホテルの最高級スイートの一室。ワインを片手にシュレンはある男と対峙していた。男は目深に帽子を被り黒のスーツに身を包んでいる。目の前にあるワインを飲み干した後、シュレンは男に話しかけた。

「お前の噂は常々聞いている。その噂を信じてある事を頼みたい」

男も同様に目の前のワインを飲み干しこう告げる。

「来る者拒まず、だ。話から聞こう」

シュレンは指を鳴らしタリスを呼び出す。タリスは机の上に一枚の写真を置く。

「貴方にはこの男を殺していただきたいのです」

写真に写っているのはゼロだった。男は写真を手に取りじっと見つめる。

「殺してもいいのなら殺す。だが、コイツはお前らの種族の英雄の
はずだが？」

男はゼロを殺すことよりも、それを頼んできたシュレンを不思議に思った。一国の主の息子。自国で戦争が起こっている状態で、何

故こんな所で自分と対峙しているのか理解できなかった。そして、英雄を殺して欲しいことも。

「理由は聞かなくていい。ただ、始末してくれれば誰でも良い」

「了解した。但し、報酬の額は俺が決める。ターゲットが満足できる存在ならば報酬は要らん。だが、つまらない相手だったらそれ相応に頂く」

男はそう言い残し、部屋を後にした。シュレンは笑顔を浮かべていた。

「やはり噂は本当でしたね」

「ああ、ゼロを始末するのに金はかけたくない。あの男でもゼロを殺すのは困難だろう。もし殺せたとしても、アイツの言う満足はする筈だ。殺せても殺せなかったとしてもどちらでも良い」

シュレンは男の全てを知っていた。あえて、どちらに転んでも良い結果になるように仕組んだのだ。

部屋を後にした男はゼロの写真をもう一度見る。裏を見たとき、ある言葉が書いてあった。

『シヤクラムスにて目撃情報あり』

余計な気遣いと思ったが、探す手間が省けたことは嬉しかった。男がラクアンの街を抜けようとした時、目の前に人影がいくつか見えた。

「おい、兄ちゃん。ちょっと待ってもらおうか」

よく見てみると、どうやらこの街を仕切っているギャングのようだ。気付けば男の周りをギャングが囲んでいる。その数は十を超えている。目の前にいるリーダー格の男は銃を向け、こう言い放つ。

「身包み全部置いていきな。この街を出るには通行料が必要だからな」

その言葉を合図に周りのギャングたちも次々と銃を向ける。しかし、男は動じる様子もなく静かに呟く。

「十秒待ってやろう。その間に逃げなければお前たちを殺す」

それを聞いたギャングたちは少しの沈黙の後、高笑いを始めた。男の論外な台詞に呆れ返っていた。

「アンタ、面白いこと言うな。自分の立場が分かってないようだ」

「もう、十秒経ったな」

男はそう言い、指を鳴らす。その瞬間、ギャングたちの喉下にナイフが突き刺さっていた。ギャングは何が起こったのかわからず、血を噴出し、その場に倒れこむ。既に息はなかった。

「さすがですね。あのマキと言う男」

窓から一部始終を見ていたタリスは静かに言った。

「当たり前だ。あんなギャング共を倒せないでどうする？」

先程のギャングはシュレンが雇った者達であつた。男・マキの力を試すためにあえて衝突させた。

「やはり、噂は本当でしたね」

「そうだな。何が起こったのかまったくわからなかつた」

マキ。男はそれ以上語らず、それ以外語らない。ただ、マキにはある噂が流れている。それゆえ、一流の殺し屋を続けられている。

一流の殺し屋と最強の英雄と

シャクラムスを後にしてからゼロの様子がおかしい。イヴはそう思っていた。近づけないような、そんな感じがしている。何か思いつめているような表情をすれば、途端に怒った様な顔にもなる。同じ街にいるのに一緒にはいない。

一人にさせてくれ。そう言ってこの街のどこかへと消えていった。

「何やってるんだよ、アイツは」

隣にいるジブリールもゼロの様子を不思議がっていた。せっかくジブリールがゼロの大事にしている本を持ってきたというのに会えなければ意味がない。ジブリールは先程からその事に対しての愚痴以外を口にしていない。

「俺のいない間に何かあったのか？」

イヴはシャクラムスでの事件のことをジブリールに話した。

街の雑踏のなか、頭を抑えて歩くゼロ。体に力が入らなく、頭痛と吐き気が酷い。歩くことも楽に出来ない様子だった。

「なんだ、体が言うことを聞いてくれない」

「ソレハ、私ガイルカラデス」

声の主、紅色の道化師が話しかけてきた。ゼロは辺りを見渡したが、道化師の姿はどこにも無かった。

「お前、どこにいる？」

「貴方ノ心ニイマスヨ。交渉成立後、私ハ貴方ノ心ヘト住ミ着イタ。ソレガ、私ヲ扱ウトイウモノデ

ス。前ノリンガーモ同ジデシタ」

「そうか。で、それがなんで俺の体の異変と繋がる？」

「貴方ト私ヲ同調サセルタメデス。心ガ一對ニナラナケレバ、私ヲ使ウ事ハ出来マセン。前ニ言イマシ

タガ、私ハ『憤怒』トイウ怒カリノ感情ヲ司ッテイマス。貴方ノ精神状態ガ『憤怒』トイウ偏ッタ感情

ノ導入ニヨリ、不安定ニナッテイルノデス。安定スルマデハモウ少シ時間ガ掛カリマス」

「わかったよ、何とか我慢する」

ゼロは当ても無く街を歩き続ける。イヴに会わない様に。街の中心へ来ると様々な店が立ち並ぶ。その中の一つ、コーヒーショップのオープンカフェに目が留まった。一人、優雅にコーヒーを飲む男。別段、何の変哲も無いスーツ姿の男がゼロは気になっていた。

一瞬、瞬きをしたほんの一瞬の間に男は姿を消した。

「お前が、ゼロだな」

声を聞き、後ろを振り返ると先程までコーヒーを飲んでいた男がいた。そして、首筋をナイフで切り付けられる。切り傷は深く、大量の血が流れた。たまたま、ゼロの横にいた女性の服に流れた血飛

沫がかかる。それを見た女性は大きな悲鳴を上げる。男は悲鳴を上げて、女性にナイフを飛ばす。女性はそのまま地面に倒れこみ、死亡した。それを見た人が次々と悲鳴を上げる。騒ぎは徐々に広がり、街の人々は逃げるようにその場から走っていく。混乱した街の中、男はゼロに止めを刺すべく、ナイフを刺しにかかる。ゼロは力を振り絞り、風の魔方阵により自身を後ろへと吹き飛ばす。後方のコーヒーショップの店内まで自身を吹き飛ばす。窓を割り、テーブルや椅子、植木鉢などに躊躇することなく店内を壊していく。優雅にコーヒーを飲んでいた客も先程の悲鳴の原因がいきなり飛び込んできた男と判断したのか、一目散にコーヒーショップから逃げ出していく。

「何だよアイツ。いきなり切りかかりやがって」

「私が居なケレバ、貴方ハ死ンデイマシタヨ」

道化師はゼロの体外へと上半身だけを出し、ゼロに言った。

「どういう事だ？」

それを聞いた道化師は自分の首元を見せ付けた。ゼロが切られた場所と同じ場所にキズが出来ている。

「貴方が刺サレル一瞬ノ隙ヲ突イテ、死ニ至ラヌヨウニ私が傷ヲ負イマシタ」

ゼロは不思議に思いながらも道化師を見ていた。それを見た道化師はゼロにこう言い放つ。

「私たち道化師ハ、主ヲ守ルノガ使命デス。不思議ニ思ウカモシレ

マセンガ主トナツタ者が死ネバ私モ

死ニマス。ダカラ、貴方ヲ守ル義務ガアリマス」

「なるほどね。それで命拾いしたわけか」

ゼロは起き上がり、体のゴミを払う。軽く肩をまわし、首を鳴らす。目付きが変わった。

「そういえば、お前に名前無かったな。だから、たった今考えた」

「私ニ名前デスカ？」

「ああ、いつまでも道化師じゃあ呼びにくいからな」

「ソレハ嬉シイデスネ。シテ、名前ハ？」

「アイギス。どうだ？ いい名だろう」

「エエ、『盾』デスカ。良イ名ヲ貰イマシタ」

「さあ、反撃と行こうか。アイギス」

「カシコマリマシタ」

死神の降臨と英雄の最期と

壊れた店内からゼロが姿を現す。男はゼロの首筋の傷が浅いのに疑問を思える。手ごたえはあった。深く切ったつもりだった。

「お前、なぜ俺を狙う」

「意味は無い。頼まれたから遂行するだけだ」

「そうか、ならしょうがないな」

ゼロは一気に近づき、男の頭を鷲掴みにする。

「死ね」

掌に小さな魔方陣を描く。男は抵抗せずにゼロの行動を見ていた。

「トライデント・ブリッツ」

ゼロの魔方陣から雷で出来た三叉の槍が飛び出す。だが、その時すでに男はいなかった。槍は直進し、建物を破壊する。

「こっちだ」

男はゼロの右側に立っていた。距離は十メートルほど離れ様子を伺っている。ゼロの掌にはまだ男の頭の感触がある。切り付けられた時と同じように何かが奇妙に思えた。

「どうやって逃げたか知らないが、そう何度も上手くいくかよ」

両手を地面に付け、男の居る地面に魔方陣を描く。

「ディメンション・ボックス」

男は魔方陣から離れようとするが、四方と上を壁で囲まれる。男が囲まれたのは壁ではなく、奇術師が使う縦長の箱だった。無数に空いた小さな穴は剣が一本入るような穴だった。

「面白い魔法を使うのだな」

ゼロは片方の手を天に向け、もう一度魔方陣を描く。箱を取り囲むように幾つもの魔方陣を創り、そこから剣を生み出す。

「サークレット・ソード」

ゼロの言葉とともに剣は箱の穴目掛けて突き刺さる。ゼロは全てが刺さり終えたのを確認し、両手を再び天に向ける。箱の上空に大きな魔方陣を描き始める。「メテオ・ブラスト」

両手を地面に振り下ろしたのを合図に魔方陣から巨大な隕石が落下する。その時、またしてもゼロを奇妙な感覚が襲う。しかし、落下する隕石は止まらない。箱を直撃し、衝撃波が周囲を一掃する。箱は消し飛び、周りは跡形も無く消し飛び、男の姿も無くなった。ゼロが一息ついた時、後ろに気配を感じた。

「異例とも言える魔法の数々。そして、星魔法の詠唱破棄。やはり。英雄と呼ばれるだけの男だな」

三度感じた奇妙なものは間違いではなかった。男は平然と、キズ一つ負わずに立っていた。

「そろそろ此方かも仕掛けさせてもらおうか」

ゼロは今まで感じたことの無い恐怖を感じ、急いでその場から離れた。男の正体を掴まなければこの勝負に勝ち目は無い。

「最後に一つだけ言うておく。我が名はマキ。時の支配人にして番人」

その言葉を聞いたゼロは耳を疑った。しかし、すでに遅かった。マキは力行使した。

マキが力行使した直後、ゼロの魔法により消し飛んだ周りの建物は徐々に元の姿を取り戻していく。マキはただ、待っていた。すると、ゼロが戻ってきた。戻ってきたというより、戻らされたと言っている。ゼロの顔は動かず、ただ、元の位置に戻ってきた。マキはゼロに近づき、懷からナイフを取り出す。

「あつけない最後だな、英雄よ」

マキは躊躇せずナイフを振り下ろす。ほんの数ミリ、ナイフはその距離で止まりゼロに刺さらない。何度力を入れても決してナイフは動かなかった。

マキはナイフに覆われている何かを見た。その何かが、徐々に姿を現す。それは手だった。手がナイフを掴み、離そうとしない。

「貴方ニ此ノ方ヲ殺サセハシマセンヨ」

声はゼロから聞こえてきた。しかし、ゼロは動いていない。よく見ると、ゼロに寄り添うように人が見える。

「何だ、お前は。何故動いている」

「貴方ニ答エル義務ハ無イコトデス」

マキは驚きを隠せないまま殴られ、遠くへと飛ばされた。その瞬間、時が動き出した。

「あいつは、どこ行った？」

ゼロは時が止まっていたことを知らない。

「アノ方ハ、時ヲ止ルコトガ出来マス。トテモ危険ナ存在デス」

「やっぱり、アイツが言った事は本当か」

「デスガ、『時の番人』ハ時ヲ犯ス者ヘ罰ヲ与エル存在」

「俺らが？ そんなことに覚えはないが」

「ヤハリ」

そう言ってアイギスは言葉を濁らせた。

「あの男はどうなった？」

その言葉の後に、マキは姿を現した。前と同じように一瞬で目の前に移動してきた。

「『時の番人』がこんなこととしていいのか？ お前にはもっと重大な使命があるだろ？」

「確かに、今の私は、ただの殺し屋だ。だが、真の目的も見つかった」

男は小さく笑った。そして、アイギスを指差した。

「ついに見つけた。実在しない道化師よ。お前は危険だ。その男に憑いているのなら、その男も同様に殺す」

「貴方こそ危険ナ存在デス」

「何も知らないと思うな、道化師よ。俺はお前を監視するために存在するのだ」

「私ヲ、監視・・・」

「今はアイツを倒すことだけを考えろ」

アイギスは我に返り、ゼロとともに臨戦態勢に入る。

「俺を倒す。時の支配からは逃れられない」

「バカ言うな。それはアイギスには効かないだろう？」

マキはその言葉を聞き、笑い始めた。

「確かに、もう時を止める必要は無い。道化師は世界を監視するだけがいい。誰かに寄り添うなどあつてはならない。それを阻止するためには禁忌を犯そう」

マキは手に持っていたナイフを自分の心臓へと突き刺した。鮮血が飛び散る。

「なんだ？ 気でも狂ったのか？」

マキは流れる血を見て苦しそうに笑っている。

「時の番人が自身の時を止めることにより死神は現れる。絶対無比な死神」

マキの心臓から全ての血が流れ落ち、地面に溜まった頃、その血はマキを包み込むように回り始めた。

「何か、ヤバイ予感がする。止めるぞアイギス！」

「了解シマシタ」

ゼロはマキ目掛けて走り始めた。しかし、すでに遅かった。大きな衝撃とともにマキの周りを覆っていた血がなくなっていた。そして、マキの後ろに大きな鎌を持った黒衣の死神がいた。マキはその場で力なく膝をつき、意識を失った。

「あれが、死神……」

ゼロは初めて死の恐怖を感じた。耳を劈くような声が聞こえてくる。

「我は死神。汝に死を与える者なり」

「逃ゲマシヨウ。トテモ敵ウ相手デハアリマセン」

「逃げることは叶わない。我が在るということはつまり、汝は死ぬということ」

死神は徐々に近づいてきている。しかし、ゼロは動けない。震えた手を握り締め、死神に近づく。

「黙れ！俺が死ぬかよ！」

ゼロは渾身の一撃だった。それは死神に当たることは無かった。黒衣の中は空っぽだった。すり抜けたゼロは再度殴りにかかる。だが、そのゼロを死神の大鎌は貫いた。

「え？」

鎌はゼロの体に大きく突き刺さり、傷口からゆっくりと血がこぼれてくる。死神は大鎌と共にゼロを持ち上げる。力の抜けたゼロはただ、ぶら下がっているだけだった。意識は薄く、呻き声を上げているだけだった。

「これで本当に最期だな。英雄よ」

体の中にいたアイギスでさえ防げなかった。ゼロの死を確認した死神は大鎌を振り、ゼロを投げ捨てる。

竜の降臨と

イヴと一緒にいたジブリールは妙な胸騒ぎを覚えた。

「どうしたの？ジブリール」

その時、街の遠くからサイレンが聞こえる。自警団が続々と街の中へと走っていく。イヴ達のいる場所まで騒ぎは広がっていた。

「何かあったんですか？」

走ってくる人にイヴは騒ぎの原因を聞いてみた。

「誰かは知らないけど人が刺されたって！一人は女性で、もう一人はやけに髪が長い男性らしいけど」

髪の長い男性。その言葉でゼロが脳裏に浮かんた。

「まさか、ゼロじゃ・・・」

「まだ決まっていらないだろ」

その言葉の後、ジブリールは何かを感じ取った。大気の揺れ。この辺り一帯が何かに包み込まれる感覚があった。

「まずい。森が目覚めます」

「どういうこと？」

「今は説明している暇は無い！間に合えよ」

ジブリールは魔方阵を描く。それはこの街全体を覆うように天空に描かれた。その魔方阵はゼロがルーネルにて使用した「別世界」の魔方阵だった。

深い意識の中、ゼロは眼を覚ました。大きな木々に囲まれた霧の深い森。ゼロは体を起こし、ため息をひとつ。

「珍しいな、そっちから来るなんて」

ゼロは霧に声をかけた。すると、霧の中から大きな、蒼い竜が姿を現す。

「貴方は私たちにとって、とても重要な人間です。緊急事態のため、こちらにお呼び立てしました」

この森には竜以外の生物は存在しない「竜の森」。そして、唯一人、その森と契約をした人間、ゼロ。

「貴方の体を治すには少々時間が掛かります。そのために少しだけ体をお借りします」

そう言うとき蒼い竜はゼロの体内に入っていく。

「何だ・・・意識が」

「私に身を任せてください。そして、我が名を呼んでもらえればよろしい」

「・・・・・・・・」

ゼロの体に入り終えた竜。ゼロの眼が徐々に蒼色に変わっていく。ゼロの心の奥から声が聞こえる。

「ゆっくりと、息を吐いてください。そして、呼んで下さい。我が名は・・・・・・・・」

『キュアノエイデス』

アイギスはゼロから離れ、建物の上で静かに見ていた。そして、自分のことをただ、考えていた。

「世界を監視・・・・・・・・」

脳裏に激痛が走る。

「私は何のために・・・・・・・・」

死神はゼロに向かって歩いていく。完全なる止めを刺すために。

「何故かは分からないが、死を逃れている。やはり、道化師を持つこの男も危険ということ」

振り上げた大鎌をゼロに照準を合わせる。振り下ろした刹那、ゼ

口の眼が覚めるのを確認した。しかし、止める必要は無い。この男には死を与えるのみ。

大鎌はゼロに当たらず、辺りに金属音を響かせた。ゼロは少し離れたところに立っている。

「死神よ、貴方は殺してはいけない人まで殺そうとしている」

「我が誰を殺そうと勝手なり。ゼロよ、道化師と共に潔く死ぬが良い」

「今はゼロではない。少しの間、このキュアノエイデスが相手になるろう」

ゼロの眼は蒼く、体には青光りするオーラを纏っている。

「誰であろうと関係の無いこと。今すぐ楽にしてやる」

死神は鎌を振るう。キュアノエイデスはそれを軽く受け流し、数発、打撃をいれる。だが、前と同じように黒衣をすり抜けるだけだった。真上に迫った鎌を避けると同時に大きく距離を取るようになって、家の屋根へと登った。

「なるほど、頭と鎌を持つ手以外は抜け殻ということか」

「死神に胴など要らぬ。在るのは貴様を殺す鎌のみで充分なり」

徐々に近づいてくる死神に対し、キュアノエイデスは大きく息を吸い、蒼色の業火を吐き出す。それに気付いた死神だが、避けきれず業火をまともに喰らう。焼き終えるのを待つ間も無く、追撃の一撃を吐き出す。

「蒼火追葬」

二度目の炎もまともに喰らい、死神の面影は無くなった。

「無駄だ。死神を殺すことなど不可能」

依然、死神の声はどこからとも無く聞こえてくる。すると、徐々に黒い塊のようなものが一点に集まっていく。そして、死神の姿へと変わっていった。

「死神とはよく言ったものだな」

「我を殺すなど不可能と分かっただろう」

死神はキュアノエイデスとの距離を一気に縮め、鎌を振り下ろす。真横に飛んだキュアノエイデスはすぐに反撃に移る。突然、足場が崩れ始める。先程、振り下ろした鎌は家を切り裂くほどの威力だった。体勢を崩したキュアノエイデスに止めを刺すべく、死神は鎌でキュアノエイデスを横一文字に切り付けた。だが、またしても死神の鎌はキュアノエイデスを切ることは出来なかった。

「逃げたか」

死神は辺りを見渡すがどこにもキュアノエイデスの姿は見えない。刹那、風が吹いた。奇妙なほど穏やかで、それでいて真上から吹いた風。死神が上を向いたその時だった。目の前にキュアノエイデスが現れ、鎌を持った右腕を掴み、粉々に砕いた。

「貴様、どこから」

休む間もなく、もう片方の腕も粉々に砕く。そして、回し蹴りで一蹴する。地面に叩きつけられた死神にキュアノエイデスは止めの一撃を放った。

三度、吐き出された蒼い炎は今度こそ完璧に死神を燃やし尽くした。

「しつこい奴だな。何度やっても同じことだ」

声が聞こえると同時に、再び黒い塊が現れ、一点に集まろうとしている。その時、キュアノエイデスは奇妙なものを見た。

一転に集まる黒い塊の中、一際目立つ大きな影がマキの体から溢れ、集まっていく場所を目指していた。

「なるほど、そういうことか」

それを見たキュアノエイデスは集まりかけた塊など見向きもせず、マキを目掛けて走っていく。そして、膝をついているマキの鳩尾に蹴りを入れる。

「ぐあっ」

壁に叩きつけられたマキは痛みにより意識を取り戻す。

「どうやら死神も消えたようだな」

先程まであった黒い塊は姿を消した。

「なぜ、分かった・・・」

「禁忌・死神の呼び声。時の番人であるお前がどうやって会得したかは知らないが、この術の弱点は術者が全くの無防備になること。禁忌を発動し、死神が敵を殺す。死神に目がいつてしまい術の弱点から眼を背けさせる最高の術。しかし、長期戦になると弱点が露呈してしまうようだな」

「く……」

「時の番人よ。貴方は決して殺してはいけない人を殺そうとした。その罪は重い。ゼロはこの世界に必要な人間だ。たとえ時の番人である貴方でも許されない」

キュアノエイデスはマキに向かい掌を向ける。ゆっくりと蒼く染まる掌を見つめながらマキは言った。

「竜の森。ゼロ。これがラファエルの言ったことか……」

「裁きを受けよ」

掌を握り締め、マキの体を蒼い炎が包み込む。

「痛みを感じさせない優しい蒼き炎。キュアノエイデス、ゼロよ、俺は時の番人と同時に道化師の管理者でもある。それが消えてしまえば、反存在が目覚ますことになるだろう。せいぜい気をつけろよ」

そう言い残し、マキは消え去った。元に戻ったゼロは胸の傷を確かめた。傷口は跡形も無くなっていた。

しばしの休息と

マキが死ぬ、それと同時刻。小さな町ムーヴの近くでそれは目を覚ます。紅に身を包む服装。手には紅き凶刃が二刀。目的は唯一つ。対になる真の存在を消すこと。

イヴと合流後、ゼロは何も話そうとしない。

「何があった？ 竜を使うなんて」

ゼロは一呼吸おいた後、時の番人との戦いを話した。竜を使ったことも。

「竜・・・あの時も使ったよね？」

イヴの言うあの時とは初めて戦ったときのことだ。

竜の森。世界のどこかに存在する竜のみが生存する森。人間唯一の契約者でもあるゼロとジブリアル以外はその存在を知らない。竜の森には様々な竜が生きており、特殊な魔方陣を描くことにより、竜を体に宿すことが出来る。但し、それ相応の負荷が掛かるため、ゼロとジブリアルの共同作業で創る魔方陣以外では宿すことが出来ない。

「で、キュアノエィデスは何か言っていたのか？」

「今の俺の体は死神の鎌で蝕まれているらしい。しばらくは森で治療をして欲しいって」

「まあ、今は無理に体を動かす必要もないだろう。なら森に行くか」

その会話を聞いていたイヴは心配そうな顔をしてゼロを見ている。

「イヴ。一緒に行こう」

「え？ いいの？」

「大丈夫だよ。イヴには色々心配かけたし、ここらで旅も一休みするか」

イヴはその言葉を聞いてゆっくりと笑った。

「ありがとう」

イヴはふと思った。自分がこれほどまでヒトのことを心配したことがあっただろうか。多分、無かったと思う。どんな身近なヒトでも心から心配したのはゼロが初めてだった。そして、それが出来たのも自分が特別なアルカディアだから。

ヤマトとアオバと（前書き）

物語はゼロとイヴの視点から少し離れてもう一人の重要な人物であるヤマトという青年の視点で描いています。

ヤマトとアオバと

場所は変わり、ファンタジア領の小さな町、ムーヴ。街中を一人の少年が全力で走っている。

「なんだ？ また遅刻か。ヤマト」

「うるせえ、分かってるならわざわざ言うな！」

少年の名はヤマト・リージック。この街で暮らしているごくごく普通の少年。遅刻とは、毎日広場で習っている剣術の訓練のことだった。

ようやく広場に着いたときには十分の遅れだった。広場ではすでに師匠のインフと同じ弟子であるアオバが訓練をしていた。ヤマトが到着したことに気付いたインフは訓練を止め、ヤマトに歩み寄った。

「まったく、いつになったら治るのだろうな。その遅刻癖は」

「すみません」

「本当に。ヤマトってばいつも遅刻するんだから」

アオバもヤマトに近づき文句を言う。

「うるせえな。分かってるよ」

同じ弟子のアオバとは子供の頃からの知り合いで、剣術の訓練を習い始めるとき、自分もやると言い出し、今まで一緒に訓練をしている。

「ちょうど二人揃ったところだ。二人で実践訓練しようか」

師匠であるインフは以前、ファンタジアの騎士をしていたが、戦場で大きな傷を負い、辞職する。現在はこうして、ヤマトとアオバの剣の師匠をしている。

「よし、今日こそ勝ってやる」

ヤマトはインフから訓練用の木刀を貰いやる気を見せる。

「いつも言ってるじゃん。その台詞」

しかし、アオバは吸収が早く、ヤマトよりもかなり上達している。そのためか、ヤマトは訓練で一度もアオバに勝てたことは無い。今日もいつも通り、アオバに勝てないまま訓練は終わった。

「師匠、お疲れさま」

訓練が終わり、アオバが帰った後もヤマトは剣を振り続けている。

「あまり練習するものでもないぞ」

インフはヤマトの訓練に付き合った後、ヤマトにあるモノを渡した。

「ヤマト、受け取れ」

ヤマトが受け取ったのは小さな球体だった。淡い水色に光っており、様々な紋章があることから高級感が出ている。

「それはフォトンの一種で『複数武装』と言ってな、武具をそれに記憶することで記憶した武具を使う
ことが出来るようになる特殊なフォトンだ」

フォトンと言えども様々な種類があるが、このように武具を収めることが出来るフォトンは高度な技術が必要とする。インフは騎士だけではなく、技術士としてもファンタジアに貢献できるほどの腕前だった。

「師匠、何でこんなものを」

「訓練を見ているうちに、お前とアオバの違いが分かったんだ」

「俺とアオバの違い？」

「アオバは剣の特性をよく分かっている。剣の振り方。捌き方。この二つが良く出来ている」

ヤマトは言葉が無かった。訓練をしているとインフの言っていることがよく分かる。常に的確に攻撃をし、こちらの攻撃を軽く捌く。

「対してお前は、何か剣に対する不満が見える」

「不満？」

インフは訓練用の木刀ではなく本当の剣を手に取り、ヤマトに向ける。

「リーチの長い槍。破壊力のある斧。遠くの敵を射る弓。お前はそ

の戦闘において状況にあった武具を
使いたいと思っている筈だ」

確かに、訓練中でも剣に不満を持ったことはある。その原因をインフは正確についている。

「お前がコレをうまく使いこなせればアオバよりも強くなれるだろう」

「はい！頑張ります」

ヤマトはインフの言葉を絶対と信じている。師匠としても男としても尊敬できるインフの言うことは間違いでないと信じている。

次の日。ヤマトは珍しく遅刻しないように広場へと向かった。昨日インフから貰った「複数武装」の効果を試すため、訓練用に武器屋においてある木で作った槍を昨日のうちに登録しておいたのだ。これでアオバに勝てるかもしれない。そう思い急いで広場へと向かった。

広場にはアオバがいた。そして、もう一人の男。インフのはずだった。しかし、インフではなかった。赤黒い衣装に身を包み、目深に被った帽子。口を覆い隠すマフラー。肌寒い季節でもないのに明らかにおかしい服装だった。そして、両手に持っている紅い双刃もアオバの様子もおかしい。木刀ではなく、剣を持って、男と対峙している。

「誰だお前！」

その言葉に振り返ったアオバ。ヤマトに聞こえないように

どうして

と呟いた。男はその隙を逃さなかった。両手の刃でアオバの体を切りつける。アオバは力なくその場に倒れこんだ。

「アオバ！」

ヤマトはアオバに駆け寄り、身を起こす。すぐにアオバの体の異変に気付いた。切りつけられた後はあるのに、血が出ていない。微かに、アオバが口を動かす。

「ヤ・・・マト・・・」

「アオバ！しっかりしろ！アオバ！」

「ダ・・・メ・・・」

それから、何が起きたか分からなかった。アオバの体が光に包まれ、氷が砕けるように一瞬の内に消えてなくなった。そこに、アオバという存在が無かったかのように。

「ア、ア、アアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ヤマトは何も考えていなかった。ただ、男を殺すためだけに走った。木刀を持つことさえも忘れて。

男はヤマトを待つことなく消えた。ヤマトはそれでも諦めなかった。街の隅々まで走り回って男を探し出した。しかし、見つかることなく、息を荒立てて周りを見渡すヤマト。再び、大きく叫ぶ。自分の虚しさを否定するように。

ヤマトとインフと

ヤマトは広場に戻っていた。今起きたことが夢かもしれないという淡い期待を持ちながら。広場にはインフがいた。

「遅かったじゃないか。ヤマト」

「師匠・・・」

すぐにヤマトの異変に気付いたインフ。

「どうした？何があった？」

ヤマトは今まで起こったことを全て話した。

「そうか、そんなことがあったのか。紅い男か」

「師匠、何か知っているんですか？」

「推測の域だが、おそらくその男は『七色の道化師』の一人だろう」

「『七色の道化師』？」

「ああ。この世界に存在する七人の道化師。奴らは無差別に人を殺していく。さらに、奴らには普通の

攻撃は効かない。突然現れ、突然殺す。対抗する手段がない」

「そんな」

「ヤマト。お前なら道化師を殺すことができる」

その言葉を聞いたヤマトは胸に小さな希望を抱いた。

「可能性の話だ。その可能性とは、昨日お前に渡した『複数武装』だ」

「これが、可能性」

「その研究段階で私は道化師の話を聞き、道化師を倒せるように『複数武装』を改造した」

ヤマトは手に取った「複数武装」を見つめている。これでアオバの敵が討てる。

「どうする？ ヤマト。このまま普通の生活続けるか。それとも」

「決まっています。俺は道化師を殺します」

インフはため息を一つ。ポケットから一枚のカードを取り出す。黒く光っているカードだった。

「これがあれば大抵のものは買える。道化師を探す旅は苦しく、辛いことが多いだろう。これは卒業記念だ。受け取れ」

ヤマトはカードを受け取り、「複数武装」と共にポケットにしまう。

「では、師匠。行って来ます」

「元気でな」

ヤマトは旅立った。目指すは紅い男。目的は復讐。

ヤマトが旅立って数分、インフは未だ広場にいる。そこに老婆が現れる。

「インフさん。はいよ、いつもの差し入れだよ」

その老婆はヤマトとアオバの訓練中に焼きたてのクッキーを差し入れに来ている。二人を孫のように思い親しくしている。しかし、今日はいつもいるはずのヤマトとアオバがいなかった。

「あれ？ヤマトちゃんは？」

「少し前に、この街を出て行きましたよ。やりたいことが見つかったらしくて」

「そうかい、そうかい、若いうちは旅をするもんだよ。ところで・・」

老婆は何かを思い出すように首を傾げながら考えごとをしている。

「どうかしましたか？」

「いやね、ヤマトちゃんのほかにもう一人、一緒に訓練している子がいたような気がしてね。確か女の子だったんだけど、名前がねえ」

「いえ、私の弟子はヤマト一人ですよ。女の子は弟子にした覚えが無いですね」

「そうかねえ？ やっぱり気のせいだったのかもねえ。最近物忘れが激しくてねえ」

「では、おばあさん。私はこれで」

「あら、そうかい。じゃあインフさん。これ食べておくれよ」

「ありがたく頂きます」

インフもまた、旅に出る。

紅い竜と

竜の森に入ったゼロとイヴ。

「よお、死人。元気そうだな。それもキュアノエイデスのお陰か」
姿を現したのは紅い竜・ヴルメリオだった。

「体を治すため、しばらく世話になる」

「勝手にしろ。それとその機械の娘は何だ？」

一瞬で正体を見破ったヴルメリオにイヴは驚いた。どうして？と聞こうとしたイヴを。

「ふん、人間の臭みを感じない。死に怯える匂いがな」

「ヴルメリオ。レディを苛めてはいけない」

ヴルメリオの後ろからキュアノエイデスが姿を現す。

「キュアノエイデス。この娘は・・・」

「言わなくてもわかっています。貴方の大切な人でしょう？拒む理由はありません」

「ありがとう」

森の中の大きな木の傍に座った二人。

「竜ってすごいね。言わなくても全部知ってるみたい」

「世界の生まれた時から存在しているからな。お陰で無駄な話をしなくて済むよ」

風が吹く。こんな風にゆっくりと風を感じたのは何時以来だろうか。ファンタジアで英雄と呼ばれ、イヴと出会い、二人で逃げる間に本当に色々なことがあった。ただ、イヴがいなければこんな体験は出来なかった。

イヴはいつの間にか眠っていた。すうすうと可愛い寝息たてながら。

この寝顔を見ると、アルカディアの最強兵器だということを忘れてしまう。それほど、可愛い寝顔だった。

ゼロは寝息をたてるイヴの顔を覗く。ゼロ、とイヴは小さな寝言を言った。それを聞いたゼロは更に顔を近づけた。徐々に唇が近づいていく。

大丈夫、分かなければ問題ない。

「何してんだよ。お前は」

その声はジブリールだった。いつの間にかゼロの真横に立っていた。

「お！お前っ！い、何時からいた？」

「お前がイヴの顔を見てたときから。それよりも『試練の森』に行つて来い」

「新しく道が出来たのか？」

「正確に言えば『見えた』だけだな。キュアノエイデスが案内してくれるらしい。さっさと行って来い。イヴには俺が話をつけておく」

「わかった」

ゼロが遠くに行つたのを確認したジブリールはイヴに近づく。胸の辺りを凝視し、小さな膨らみを二つ発見する。ジブリールは頬を緩ませ徐々にその膨らみに手を伸ばす。触る瞬間に後頭部に何かを押し付けられた。感触からして、振り向かなくても分かる。しかし、一応振り返ってみる。ずばりだ。

振り返った目の前には銃口が広がっていた。しかし、誰もいない。銃が続いている先にはイヴがいる。どうやら、無意識のうちに自己防衛が発生し、銃が発現したらしい。ゼロのときは出なかったが、自分で出てしまったという、まだまだ心を許されていないことを痛感させられたジブリールだった。

ジブリールは肩を落とし、イヴの横に座った。未だ寝息をたてているイヴは本当に人間のようなだった。

森の試練とティエラたちの戦いと

キュアノエイデスは森の奥へと続く道の入り口にいた。

「よく来ました。ゼロ、準備はよろしいですか？」

「今回の試練の森の住人は？」

「緑の尻尾を持つ竜です」

「わかったよ。行ってくる」

ゼロは今、ヴルメリオ・キュアノエイデスの二匹の竜の試練を突破している。竜それぞれが持つ試練の森を突破し、その竜の名を聞くことで始めて契約が成立する。そして、全ての竜との契約を終えたとき、竜の長「ラグナロク」は姿を現す。

ゼロ達が竜の森に入ってから二ヶ月が流れた。ゼロのキズは次第に癒え、森に挑戦している最中、ティエラ一行はシャクラムスに到着した。大きな事件があったとのことでファンタジアから派遣された騎士団と共に事件の後処理を行った。

カルヴァンは黙々と散った瓦礫を片付けている。それをマルスは距離を取って見ていた。

「なんだ？何か用か？」

「いえ、別に」

「なら手を動かせ」

マルスは言われるまま手を動かした。マルスはエリオット十二世の側近・カルヴァンとファンタジア騎士団において最年少で「魔法騎士」の称号を貰ったローラン。それに「ゼロに傷をつけた男」と噂されているティエラ。どうしてこの三人と自分が任務をしているのだろうと思った。

カルヴァンとローランはティエラの命令に従っている。確かに最初、カルヴァンとティエラが戦ったとき。噂が本当のように感じられた。それを二人も感じたのだろう。

カルヴァンの攻撃を一撃も当たらずに、かつ一撃でカルヴァンを倒したティエラ。それを見てローランもティエラの実力が分かったのかもしれない。

しかし、マルスはティエラの力を目の当たりにし、自分がこの部隊にいること自体が可笑しいと思った。ティエラが何故自分を選んだのかに疑問を持った。この街に来る道中、何度も聞いたけど教えてくれなかった。

アリエスはどう思っているだろう。よく話はするけど、身の上の話しかない。この部隊のこととか、任務のことは全く話したことはなかった。

「おい」

不意に頭を鷲掴みにされる。強制的に振り返させられると目の前にはカルヴァンがいた。

「さっき言った事すら真面目にできない怠け者なのか、お前は？」

声は静かだが、明らかに表情が怖い。

「す、すみません。すぐやりますっ!」

マルスは恐怖の余り声が裏返ってしまった。手を離すと、マルスは急いでその場を離れ別の場所で作業を始めた。

一方、ローランは街の様子を伺っていた。事件の後処理にしては、騎士団に人数が多い。そんな気がしていた。

「サボりは良くないよ。ローラン」

背後にティエラがいた。

「お前もだろ。それに何か様子がおかしい」

「まあ、たかが火事処理のためにこんな人数が動員されるのはおかしい。リヒル卿も何も話してはくれないが、おそらくこの近くでまた戦闘が始まるのだろう」

「まだ、戦争は続くのだな。いつになれば終わるのだろう」

「終わらせるために、ゼロを呼ぶんだ。そのために俺たちはいる」

二人の予想通り、火事処理の二日後にリヒル卿から戦いがある事を通達された。

決戦前夜、ティエラはアリエスとマルスを呼んだ。

「何か用ですか?」

「用がなければ話してはダメか？たまには無駄話もしたいさ」

二人はティエラの横に座った。それからしばらくは他愛のない話を続けた。

「なんだ、マルス。ゼロと会ったことあるのか？」

「はい、ローランさんがいると言い難いんですが、行方をくらます前夜に襲われて」

「なるほど、アリエスは会ったことあるの？」

「いえ、私はないです。でもやっぱり魔術師を目指すものにとっては憧れの存在ですよ。ゼロさん
て」

「ティエラさんはゼロさんとはどういう関係なんですか？」

「昔の馴染みだよ。あいつが独りになった頃からの」

ティエラの言葉には意味深なものがあった。おそらく、二人にしか分からないことだからだろう。

「明日は、ここにいろよ。死ぬぞ」

最後の台詞は冗談交じりで言い、ティエラはキャンプに戻った。マルスもアリエスも何が起こるか分からないので、一応明日に備えて寝ることにした。二人とも初めてのアルカディアとの戦闘。緊張しない方が無理かもしれない。

目指すはゼロの街と

その日は朝早くから戦いが始まった。エリオット・カルヴァンもこの地には正規の軍として来ていない為、前線で戦うことになった。ティエラも同様に前線にいた。

「あの二人は大活躍だな。そろそろ俺も戦うから、ここにいろよ」

昨日話したとおり、ティエラはマルスとアリエスを街に置いて、戦場へと赴いた。

「やっぱり、三人ともすごいね」

「うん。他の騎士と明らかに違う」

二人はティエラの言いつけを無視し、戦場の近くにある丘から戦闘を見ている。どうしても三人の戦いぶりが見たかったから。

ローランは風を駆りアルカディアの兵器を切り倒していく。カルヴァンもさすがはエリオット十二世の側近だけはあった。「無音」と呼ばれている戦闘術は敵の人口兵器をいともたやすく殺していく。全ての武術において音を出すことなく敵を倒す騎士。

それにティエラもすごかった。ティエラもローラン同様に魔法騎士のようだが、どんな魔法を使っているのかは分からなかった。だけど、この三人がいるだけで、戦局は完全にこちらの有利に進んでいく。

結局、三人の活躍と空からの攻撃がなかったアルカディアの軍はあえなく撤退していった。

戦闘が終るとティエラは早々に支度を始めた。

「さっさと移動するぞ。リヒルとなるべく関わりたくないからな」

「何か知られたらダメなことでもあるんですか？」

ティエラの言葉にアリエスが質問をする。

「俺たちの任務は極秘だ。ここにいる理由を聞かれてみる。何て答えればいいんだ」

カルヴァンは呆れたように言い放った。

「どんなときでも、アルカディアに負けるなど許されません」

対抗するようにローランはカルヴァンに言った。

「それで、任務を放棄しなければならぬ状況になってもか？」

なにやら険悪なムードが流れ始める。

「俺が決めたことには従って貰う。どんな結果になっても俺が責任を取る」

その言葉で二人は黙ってしまった。任務も進展がなく、仲も悪くなる一方。果たしてこれでゼロなど見つかるのだろうか。マルスは不安になっていた。

宴を挙げている騎士たちを横目にこの街を出て行くことにした。

だが、出口付近にはリヒル卿が待ち構えていた。

「何処へ行く気だ？ ティエラ」

全てを見透かしたように立っているリヒルは徐々に近づいてくる。

「別に、ちょっと通りかかってね。止む無く戦闘に参加した帰りだよ」

「お前！ 言葉遣いに気をつけろよ！」

「構わん。こいつに何を言っても無駄だ」

カルヴァンの言葉をリヒルは笑ってごまかしている。

「特に用がないなら帰るけど」

「ゼロを探しているんだろう。つい先程、エリオットから連絡があった。お前がこの街に来たときは協力してくれ、と」

「まったく、何処が極秘なんだよ」

「そう言うな。ゼロは、この街より東の方へと向かった。まだ、遠くには行っていない筈だ」

「東か。そういや街が一つあったな」

荷物を持ち、街を出ようとしたとき。目の前に馬車が止まった。

「俺からの餞別だ。受け取れ」

「礼なら何もないぞ」

「構わん。お前とゼロでこの街に訪れてくれればそれでいい」

「なら、遠慮なく貰っていくわ」

馬車に荷物を積み、一行はゼロが向かったとされる街へと急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6300h/>

二人の英雄と七人の道化師と

2010年10月11日17時26分発行